

神奈川県水産技術センターメルマガ 192-215

no192	2007年4月20日	P1
	“塩分”海の水のしょっぱさ-【その5】 城ヶ島の入江で見たアマモ	
no193	2007年4月27日	P3
	-メガマウスの話 - マグロ資源を守るもの これからも美味しいマグロをいただくために	
no194	2007年5月4日	P9
	たまねぎのぶつ切りのようなイカ（究極のイカ？） アナゴの測定	
no195	2007年5月11日	P11
	観賞魚フェア 海から見た景色	
no196	2007年5月18日	P15
	ヨーロッパ各国における栽培漁業に対する対応 ヒラメの金さん	
no197	2007年5月25日	P21
	仕事から 最大で60cm、寿命は20年「イサキ」	
no198	2007年6月1日	P23
	「平塚市漁協の漁場改善の取り組み」 さかなの性格と飼育設備	
no199	2007年6月8日	P26
	漁業者グループの紹介（その2） 人工衛星画像閲覧システムのバージョンアップ	
no200	2007年6月15日	P28
	カエル 「さかなグッズ」コレクション（その12）雑もの3	

no201	2007年6月22日 たこ とらふぐの放流	P30
no202	2007年6月29日 相模丸顕彰碑について あなご学うんちく(5)	P33
no203	2007年7月6日 ベンケイ 子安の運河へのアマモ移植	P36
no204	2007年7月13日 トビウオが飛び始めました 定置網の側張り敷設	P38
no205	2007年7月20日 海で働く宿命 海藻おしば教室に向けて奮闘中	P42
no206	2007年7月27日 謎の物体 鮎の釣りも色々です	P44
no207	2007年8月3日 「♪もしもしカメよ-♪」 円筒型孵化器によるアユ卵の管理	P46
no208	2007年8月10日 調査あれこれ7 情報処理室こぼれ話 親切的な機能も時として!?	P50
no209	2007年8月17日 浜のかあちゃんの店オープン ホットケない?ホットケドジョウ	P52

no210	2007年8月24日	P54
	できそうで、できない。 -ダンゴウオの話-	
no211	2007年8月31日	P58
	Dr.DavidStarrJordan 漁師さんや漁協等のブログ	
no212	2007年9月7日	P60
	キンメダイはどのぐらい生きるの？ 人工産アユ種苗について	
no213	2007年9月14日	P62
	“塩分”海の水のしょっぱさ-【その6】 沿岸域の多様な生態系に根ざした沿岸漁業の存続（その1）	
no214	2007年9月21日	P64
	「豊かな海づくりイベントのお知らせ」 アナゴの雄と雌	
no215	2007年9月28日	P66
	「よもやま話6」 空から見た景色	

神奈川県水産技術センター メールマガジン192

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.192 2007-04-20

~~~~~

## □研究員コラム

○“塩分” -海の水のしょっぱさ-【その5】 (資源環境部 山田 佳昭)

○城ヶ島の入江で見たアマモ (企画経営部 長谷川 保)

○“塩分” -海の水のしょっぱさ-【その5】

前は、クヌーセンにより塩素量から塩分を求める手法が確立されたところまでお話ししました。

分析的に求められた塩素量から計算することで塩分を算出できるようになったのですが、塩分を使わずに塩素量のまま表記されることがありました。

1970年代までの論文や報告には、時間的な変化(年間を通してどう移り変わるか、など)や空間的な分布(海面から深くなるにつれてどう変わるか、天気図のように水平的にどのように広がっているか、など)を表す場合にも塩素量で書かれているものが見られます。

「海洋観測指針」という手引きがあるのですが、これに「海洋観測常用表」という附録が付いていました。塩素量から塩分や密度を求める早見表が載っています。現在のようにパソコンで表計算ソフトでも用いれば簡単に計算できたのですが、往時は専らこれのお世話になりました。いまも手元においてあります。

メートル⇄尋(ヒロ)やキロメートル⇄湊(カイリ)の換算、緯度経度の1度の長さなど、ちょっと調べるのにも便利なものです。しかし関係ない(?)人には粗末に扱われ、捨てられていたものを回収した覚えもあります。「俺は水産だから海は関係ない」、という人は今でもいます。

ともあれ、塩分と塩素量の関係は、1960年代になって<塩分(%) = 塩素量(%) × 1.80655>と修正されたりはしましたが、引き続き用いられてきました。

それでも、塩素量を分析的に求めるのは、前回の終わりに述べましたように、いろいろ厄介ですので、他の方法も検討されました。

塩素量から塩分や密度が計算できるのなら、比重(以前ご紹介した浮き秤で測る)や屈折率(塩分が高いほど大きい)でも可能だろう、ということなのですが、精度の上で限界があるようで、簡便法として用いられるにとどまりました。今でも海水魚を水槽で飼育したりする際には使われています。

そうこうするうち、いっそのこと電気で測ってしまえ、といった考えが出てきます(なおも続く)。

○城ヶ島の入江で見たアマモ

水産技術センター(本所)は、三浦市三崎町の城ヶ島にあり、この島の東側に小さな入江(奥行き、幅ともに約40m程度)があります。(水産技術センターからは歩いて6分程)少し前になりますが3月の中頃、天気が良いので昼休みにこの小さな入江に行ってみました。

入江の口元には防波堤がありますが、その防波堤の沖側の海を見ると水深5-6m程ですが、底(砂地)までよく見え、海底に点在する岩には、ホンダワラのような大型海藻が見えます。そして、海の色は透明ガラスのように透き通った淡い緑色をして輝いており、久々にきれいな海を見ることができました。

前置きが長くなりましたが、防波堤の内側にある入り江をよく見ると、アマモがたくさん茂っていました。ただし、外海に通じる防波堤のないところから入り江の浅場に向かい放射状に砂地が見え、その砂地の見える周辺にアマモが生えていました。当然、防波堤のないところが最も深く、岸に近づくに従い浅くなっています。

水産技術センターのアマモに関する調査では、アマモが繁茂する条件は、「光の届く量」つまり海の透明度や繁茂する場所の水深、並びに「波の強さ」などが大きく影響していることが分かっています。

この入江のアマモの分布を見ると、「防波堤がない場所は波が強く、水深が深い所(光が届きにくい所)」であり、その場所にはアマモが見られず、「防波堤から岸に向かい、水深が浅くなり光が届きやすい浅場で、波が弱まる周辺」でアマモが多く繁茂していました。我田引水かもしれませんが、水産技術センターのこれまでの調査結果を、この小さな入江が端的に表現しているように感じました。

皆さんも海に出る機会があれば、このような目で小さな入江を観察されるのもおもしろいかもしれません。

- 
- 水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
  - 配信の変更、解除は、こちらから↓
- <http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

---

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガ193

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.193 2007-04-27

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.193 2007-04-27

~~~~~

□ 研究員コラム

○ -メガマウスの話- (企画経営部 臼井 一茂)

○ マグロ資源を守るもの これからも美味しいマグロをいただくために (栽培技術部 一色 竜也)

○ -メガマウスの話-

2006年5月、相模湾の西、神奈川県足柄下郡湯河原町の沖合い約1キロにある定置網（福浦漁協所属）に、巨大な生き物が入りました。それはとても希少で、世界中でもまだ36匹しか見つかっておらず、国内では10匹目であった「メガマウス」というサメの仲間でした。

このメガマウスは、大きく開く口が特徴的で、その大きな口が名前の由来となっています。30年程前にハワイのオアフ島沖で捕獲され、日本では約20年ほど前に静岡の海岸で発見されていますが、生態などはまだまだ分かっていなくて、神秘のベールに包まれた生き物なんですよ。

それでもいろいろと調べてくるといろんなことが明らかになっているのです。まず、太平洋やインド洋など熱帯から温帯に生息していると考えられており、歯は小さくて大きく開く口なので、プランクトンを食べているようです。

また、生きているメガマウスに超音波発信機を装着して追跡した観察記録があるそうで、日中は水深100-200m程で泳いでいたそうですが、夜間は10-20m程のという浅いところまで浮上してくるそうです。それから、泳ぐスピードはかなりゆっくりで、時速は約1kmだそうですから、プランクトン位しか食べられないですよ。そう、漂っている感じでもんね。

また、遺伝子の解析から近縁種と思われるのはウバザメだそうで、両者ともプランクトンを食べているんですね。そういえば、ニュージーランドで日本のトロール船「瑞洋丸」が引き上げた謎の生物“ニューネッシー”と新聞を賑わせたのは、腐敗し下あごがとれてしまったウバザメだったんですよ。

今回のメガマウスは体長5.69m、体重1.2tと、国内で発見され計測された7匹の中では最も大きく、世界的に見ても最大級の大きさのメスだそうです。

ウバザメを含むネズミザメ目のサメは、母体で卵がふ化する胎生であることが多いようですが、このメガマウスの繁殖については明らかになっていませんでした。そこで、専門家の藤田清・元東京海洋大学教授に見てもらったところ、交尾の際についたとみられる傷があったそうで、胎生か？それとも卵生か？と新事実が明らかになるかと期待されましたが、受精卵が見つかっただけにとどまったそうです。

でも、子宮自体は大きく膨れ、もう少し時間がたってさえいれば確認できただろうとのことで、謎はまだ謎のままです。

現在、メガマウスの標本は国内には、福岡県のマリンワールド海の中道、静岡県東海大学海洋科学博物館、そして今回、地元、神奈川の京急油壺マリンパークに特別展示されました。

京急油壺マリンパークの特別展、早速見てきましたが、その大きさや、サメのイメージとちょっと異なる姿、迫力ですよー。そして、やっぱり海って、土の上で空気を吸っている僕たちには、未知の生物がいて、そして未知なる世界なんですよー。

そういうのって、子供の時にあこがれましたよね。久々にワクワクするものを見せていただきました。それにしてもでかい口ですよ！！

メガマウスの写真はこちらから↓

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p582771.html>

○マグロ資源を守るもの これからも美味しいマグロをいただくために

先日、三崎の魚市場でマグロ漁船の船首さんの講演を聞いてきました。試験場に勤めてからの数年間、私はマグロ漁業の調査研究を担当していたので、当時を知る者として講演内容は大変興味深いものでした。ただ、特に印象深かったことは、残念なことの良い話ではなく、今の状況はあの時より改善されず、さらに厳しいものになってしまったなあというものでした。

私が担当していた当時も、人件費を抑制するために外国船員を日本人船員の代わりに乗船させたり、なるべく漁船を日本に帰さないで往復の航海日数を生じさせないなど、それこそ爪に灯を灯すようなコストカットを強いられておりましたし、業界上げてマグロ漁船の2割減船に取り組みなど、業界再編が取り組まれていたところでした。しかし現在、三崎にあるまぐろ船漁業会社は減少の一途を辿り、とうとう2社になってしまったようです。

でも、マグロのイメージとして一般的にはどうでしょう？ そんな暗いイメージを持つ方は少ないのじゃないでしょうか。日々、マスコミから報じられるマグロの話題は、美味しいマグロの寿司屋や料理店、安売り店の紹介といったものが中心で大変華やかな印象を受けます。マグロの人気や話題性は依然として高く、日本人のマグロ好きは留まるところを知らないかのようです。今後もこれまで通り、いつでもどこでもだれでも手軽にマグロを食べられる時代が永遠に続いていくことを、誰も信じて疑わないような感があります。

でも、私はマグロを食べられなくなる日というのが、刻一刻と近づいているような気がしてならなりません。ここ十数年の軌跡を見ても、マグロ資源は年々減少の一途を辿っておりますし、それに伴うマグロ漁業やマグロそのものの消費に対する世界の見る眼が厳しくなっているのは間違いないからです。

すでに世界のまぐろ漁場は1960年代の前半に開拓され尽くし、今後新たなマグロ資源が発見され、漁獲が増加する要素は全くないといえます。昨年「大衆マグロにも漁業規制」との記事が新聞紙面を賑わしたことがありますが、元々資源量の少ないクロマグロやミナミマグロといった「高級マグロ」に厳しい制限が科されるだけでなく、資源量がわりと潤沢にあった「大衆マグロ」であるメバチやキハダにも、いよいよ規制がかけられる時代が来たとのこと。そしてこの「大衆マグロ」こそ、庶民の日々の食卓に上がる刺身マグロであり、刺身の盛り合わせ998円とかスーパーのチラシにあるマグロの刺身は、まさしくこの「大衆マグロ」のことなのです。こうしたマグロでさえ、今や自由に漁獲することが制限されようとしているのです。

特に、刺身マグロとして用いられるのはメバチですが、メバチ資源の悪化を助長しているのは、巻網漁業と増大する外国はえなわ漁船といわれています。ここ数年、巻網漁業は小型のメバチの漁獲量を増大させていますが、一般に小型魚の保護は乱獲を防ぐ手立てとして資源管理のセオリーといえます。メバチ資源の利用はその流れに逆行してしまったようです。また、日本漁船を2割も減船したのに、その効果が現れる前に外国漁船が増大してしまっています。

かつて、まぐろはえなわ漁業における日本漁船の優位性は際立っていましたが、外国船員の混乗が当たり前になってしまったから、日本漁船の漁業技術が外国漁船にも伝播してしまい、また日本漁船において中核となって働いている人々の顔ぶれが外国漁船と変わらない状況になってしまったことから、その優位性は急速に失われてしまいました。今や外国漁船でも日本漁船と同等の漁獲能力を持ちえたということで、これが増えてしまっただけで日本漁船の減船効果も無きに等しい結果になったといえるのです。

これら外国漁船は日本漁船より人件費等のコストの点で優位なため、今やマグロ流通に外国漁船抜きには考えられない状況になっています。経済学的に言えば、生産コストの高い国から安い国々に生産拠点が移っていくというのは自明であり、それが進んで何が悪いということでしょう。日本の多くの産業が空洞化していったのも同じ傾向です。ただ、マグロ漁業が他産業と異なるのは、資源の減少に伴って、枯渇を防ぐという観点から国際的に規制が取りざたされる事態になってしまったということです。つまり競争原理に則って獲れるところまで獲り尽くしてしまうと、おそらくは回復不可能な資源レベルまで落ち込み、産業そのものが成り立たないという結果に陥るからです。では、規制をかけつつ外国船にマグロを獲ってもらえれば良いように思われますが、本当にそうでしょうか？

資源の枯渇を防ぐ手立てとしては漁獲量規制や漁期規制等がありますが、実効力のある規制を行うには、資源動態に関するデータが不可欠です。

現在のところ、マグロ資源について質量とも十分なデータを持つ国は、我が国において他はなく、国際資源管理は我が国のデータを基に議論がなされています。この点で外国勢は漁獲統計すら整備されていない現状なので、彼らに全て任せるには、こうしたデータの整備も同時に進める必要があるのです。もし、この事態を甘くみると、野生生物保護といった自然環境保護の観点から、人類の敵とみなされ、マグロを獲って食べることが悪であるという事態に陥りかねないのです。

日本漁船は漁獲統計データの報告が義務付けられているのですが、義務以前に、資源に対する漁業者の意識が高いと感じられます。国際資源管理の根拠となるデータとして漁獲量のほかに、漁獲物の年齢組成データが必要です。ただ、これを得るために

は年齢組成を推定しやすい魚体長組成が必要となります。10年近く前から水技センターでは、これら魚体長に関するデータを漁船船上で漁業者自らが測定し、データを集めるやり方で報告していただいています。

マグロはえなえわ漁業は100km以上もの大型の漁具を扱う重労働です。その漁場は大洋のど真ん中、大きなマグロ漁船でも木の葉の如く波に翻弄されます。そんな状況の中、厳しい漁撈作業に加えて1尾、1尾、デッキに上がってくる魚を測定するのは、並大抵の苦勞ではありません。ここ10年近くの間、この取り組みを続けてくれている漁業会社があります。その会社こそ、三崎に現存し健闘されている前述のマグロ漁業会社2社なのです。

日本漁船がこうしたデータを大切にしてきた精神性は、やはり日本人にとってマグロは欠かすことのできないものであったからだと思います。資源を大切に、永続的に利用しつづけようとする願いや望みが無ければ、データを残そうという発想は生まれられないと思うのです。この長期間にわたって、魚体長測定を担い報告を続けて下さった漁業者の方々に、私は本当に頭が下がる思いがいたします。この資源を守るという精神性こそは外国漁船には真似のできないことと私は確信しております。今のような状況こそ、資源を利用するものにとって欠かすことのできないものは、資源を守りたいという確固とした精神性なのだと思います。これこそ「マグロ資源を守るもの」であると思うのです。

経済学的にみれば日本漁船は高コストで生き残る余地は少ないかもしれませんが、しかし、こうした資源に対する高い精神性は誰かがどこかで受け継がないと、マグロが食べられなくなる日はそう遠い将来ではないと予感がしています。

マグロ漁船の写真↓

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p582772.html>

■ 水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
■ 配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン193-1

メガマウスの話



写真1 2階から写した全体像

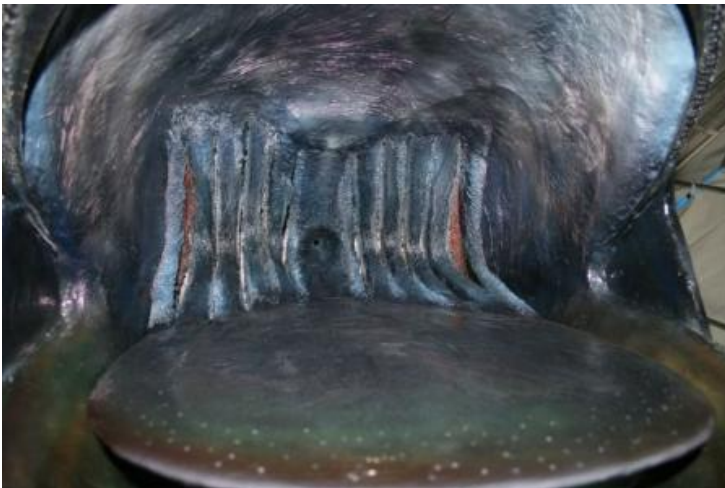


写真2 メガマウスの口の中



写真3 前から見たところ

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン193-2

マグロ資源を守るもの これからも美味しいマグロをいただくために



写真 マグロ漁船

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン194

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.194 2007-05-04

~~~~~

## □研究員コラム

○たまねぎのぶつ切りのようなイカ（究極のイカ？）（企画経営部 中村 良成）

○アナゴの測定（資源環境部 田島良博）

○たまねぎのぶつ切りのようなイカ（究極のイカ？）

記録的な暖冬のツケを取り戻すように肌寒い日が多い春ですが、新緑のまぶしい季節が近づき、三崎魚市場には早くも麦イカ（スルメイカの若い個体）が水揚げされるようになりました。活魚の水槽には美味しそうな大きなヤリイカ、ケンサキイカも泳いでいます。（そんな魚市場の光景は適宜当所のHPの「市場を歩く－中村編」で御紹介していますので御笑覧くださいませ幸いです。）

さて、もう20年近く前のお話になりますが、三浦半島のある魚市場で解禁日のアワビ・サザエの市場調査を行ったときのことです。この日は周年禁漁区としている漁場が解禁され、潜水部会の漁業者が総出でアワビやサザエを漁獲します。年に一度しか漁業者が入らない漁場ということで、水産試験場（当時はこう呼ばれていました）としてもアワビ・サザエの成長率や生残率を調査するのに絶好のデータとなるため、担当者は朝から市場に張り付き、アワビやサザエを片っ端から測定していきます。

アワビの種（メガイ・マダカ・クロ）を同定し、殻の頂上部をちょっと磨いて放流物か天然物か確認し、重さと大きさを測ります。アワビを傷つけずに剥がす人・殻を磨く人、測定する人、記帳する人、流れ作業とはいえ、いつまでも蓋のないアワビを水の外に出しておくわけには行きませんから眼の回るような忙しさです。

さて、ちょうどお昼の一段落が近づいた頃、潜水部会の会長さんが「一緒に昼としようや」と一枚の皿を持ってやってきました。皿には黄白色で数センチの直方体が山盛りになっていました。「何だろう？」山芋か大根にしては黄色身が強く、少し遠目からは生の玉ねぎのざく切りにしか見えませんでした。「変なものを食べるんだなあ、私は遠慮しておこう、自分の弁当だけでいいや」と思いながらアワビを測定し終わると、部会長さんを囲んでの昼ご飯となりました。

改めてお皿を見ると、それは取れたばかりのスルメイカとヤリイカのぶつ切り。飴色に輝くその切身は一つ一つが反り返るほどのキトキトの活の良さでした。

いや、うまかったですねえ！本当はイカの旨みは死んでから1－2日たってからが最大となり、取れたては歯ごたえを楽しむだけののですが、かむたびにほのかに甘い旨みが染み出してきて、自分で用意した弁当はおかずを食べるまでもありませんでした。心地よい潮風の吹く市場、一仕事の後という雰囲気割り引いてもイカはとにかく絶品でした。

「あのときの時のイカはうまかったねえ」会議などでその時のメンバーが集まると20年近くたった今でも必ずこの話題に花が咲きます。もう何十回と無く話しているというのに・・・

しかし、それからしばらくはイカというイカが生臭く感じてしまい、「何を食べてもおいしい」という元の鈍感な味覚に戻るのに一ヶ月近くかかってしまいました。何であれ頂点を極めるとその力を維持するのは難しいものですね。まずは財力が足りません(笑)。

○アナゴの測定

現在私はマアナゴの資源調査を担当しています。資源調査の基本のひとつに、漁獲物の精密測定というものがあります。これは、漁獲された魚の体長や体重、性別や生殖腺の状態、年齢などを調べて、何歳の魚がどれくらい獲れているか、産卵時期はいつかなどを詳しく調べるためのものです。

ところで、皆さんはマアナゴを鮮魚店やスーパーで生の状態で購入することはありますか？恐らくあまりないと思います。そもそも、あまり売っていないですね。たまに開いたアナゴをパック詰めにしたものが売られていますが、丸のままというのは見たことがありません。丸ごとじゃ持て余しますよね。

神奈川県内でも、漁獲されたマアナゴの一部は、パック詰めなど開いた状態で出荷されています。現在のところ、活魚出荷が主体ですので、漁獲動向を把握する上では、出荷された重量を調査すればよいのですが、今後「開きアナゴ」の出荷が多くなれば、パックなどの出荷量も調査する必要があります。しかし、開いたアナゴ、元はどのくらいの大きさで何グラムくらいあったのでしょうか？これは、1パックの重量や開いたものを1個ずつ計ってもわかりませんよね。

丸ごとの体長や体重を測った個体を開いた状態にして、その重量データを取っておけば、あとはパック詰めの中身の規格がある程度把握できるだけで、出荷されたパック数から漁獲量が推定できます。

前置きが長くなりましたが、そうです、精密測定の一環として、アナゴを開き、可食部の重量のデータを取ることに挑戦したのです。しかし、平たい魚をさばくことは多いので、比較的慣れていますが、「長物」となると話は別です。通常なら1時間から1時間半程度で終わると思われる測定に、3時間近くかかりました。今回は、平均歩留まりが65%くらいでしたが、出来上がった「開きアナゴ」を見ると、「もう少し練習しましょう！」という感じでした。

今回は50尾のデータが取れましたが、統計的に処理するためには、もっと多くのデータが必要になります。何より、歩留まりをもう少し上げないと、実際に出荷されている製品を換算するためのデータとしては精度が落ちてしまいます。平均歩留まり70%を目標に、アナゴ開きの練習は続きます・・・70%で換算しちゃってもいいのかな？

-----  
■水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）  
■配信の変更、解除は、こちらから↓  
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガ195

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.195 2007-05-11

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.195 2007-05-11

~~~~~

□研究員コラム

○観賞魚フェア（資源環境部 岡部 久）

○海から見た景色（資源環境部 仲手川 恒）

○観賞魚フェア

4月の頭、テレビのニュース番組で、江戸川で開催中の観賞魚フェアの様態を紹介していました。江戸川といえば日本でも大和郡山や弥富と並ぶ金魚の一大産地です。聞けば品評会もかねており、各養魚場や個人が丹精した金魚が見られるということで、たまには目の保養をと思ひ、最終日に子供をつれて出かけました。

まず、入り口に展示してあったのが農林水産大臣賞を受賞したという琉金です。20cmはあるでしょうか、鮮やかな赤と白の配色のバランスといい、背中の盛り上がり、腹の張り、尾びれの具合といい、「これぞ日本一の金魚」という姿にしばらく見入ってしまいました。

子供らは大きいことには驚いていましたが、あまり感動しなかった様子。むしろ目が上を向いた頂天眼や水泡眼をはじめ、出目金、鼻房など、形が変わったものに興味津々、指を指して笑ひ出す始末です。私はというと、見たことがない変わった品種よりも、昔ながらの三尾の和金や東錦、日本各地で品種改良された地金や土佐金などに目を惹かれました。

そこに集められた魚は文字通り選りぬかれてきた高級魚です。その品種の特徴を良くあらわし、将来性を感じさせる若魚から立派な体格の親魚まで、実に見事な展示会でした。こうした伝統的な地場産業が、後世に受け継がれることを祈るばかりです。

高級な魚でなくても、夜店ですくった金魚もうまく飼えば20年は生きますし、大きく成長してくれます。帰り際の抽選会で下の子がエアポンプとろ過器のセットを当てて大喜び。「早く金魚を飼おうよ。」としばらくのあいだ大騒ぎをしていました。

○海から見た景色

皆様も浜辺から海を眺める機会があると思います。逆に海から陸地を眺める機会は少ないと思います。

私は、漁船や調査船から神奈川県の陸地を見る機会が多くあります。特に冬場は空気が澄んでいるため、すばらしい景色を見ることが出来ます。

同じ神奈川県でも、場所により景色はさまざまです。ランドマークタワーなど高層ビルが立ち並ぶ横浜、緑の多い三浦半島、関東平野に住宅地が広がる湘南、丹沢や箱根の山々が美しい相模湾西部といった感じです。

何より美しいのは、やはり富士山でしょうか。でも、冬は海は寒い。

写真 海から見た景色

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p582768.html>

■水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
■配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン195

海から見た景色



写真1 大型船の向こうにはベイブリッジとみなとみらいが見える



写真2 東京湾アクアラインの風の塔と海ほたるP A



写真3 東京湾の入り口・観音崎



写真4 鎌倉の由比ガ浜海岸とウインドサーフィン



写真5 烏帽子岩と茅ヶ崎



写真6 雪化粧をした丹沢・大山

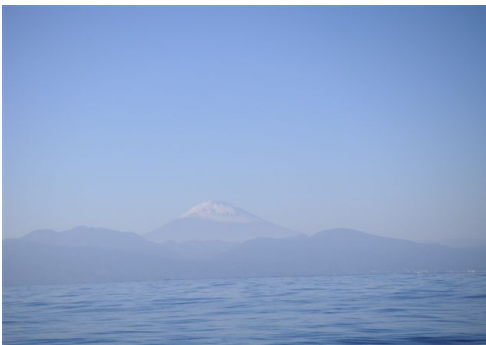


写真7 富士山

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン196

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.196 2007-05-18

~~~~~

## □研究員コラム

○ヨーロッパ各国における栽培漁業に対する対応 (所長 今井 利為)

○ヒラメの金さん (栽培技術部 長谷川 理)

## ○ヨーロッパ各国における栽培漁業に対する対応

2007年5月6-8日にベルギー ブリュージュで開催された“生態系を基礎とした資源増大”研究集会に招待され、日本における栽培漁業の考え方と種苗放流の実態について福山大学の伏見 浩教授と私(今井)が報告してきました。

参加者はFAO, EC本部大臣、ベルギー、ノルウェー、イギリス、スペイン、イタリア、デンマークの研究者、政策担当者、ベルギープロバンス州知事、ベルギー漁業協同組合連合会会長、私たち2人でした。

EC各国の漁業政策ではTACなどの管理方策を主体に実施してきてきましたが、日本における種苗放流事業に対しては生態系の攪乱を懸念して、批判的な立場をとってきました。従来、ヨーロッパでは小規模の放流や実験が行われていましたが、放流効果の判定や経済的な効果の把握および栽培漁業を推進する社会的体制の整備が十分できなく、この点における意見を求めてきました。このワークショップでまとめられた提言は、EC委員会へ勧告書と言う形で提出される予定です。EC委員会でこの勧告書が採択されるとすると、ヨーロッパにおける栽培漁業の歴史的転換点になる会議でした。

この会議に先立ち、5月4日、ベルギーのアントワープ大学において大学院生に講義をしてきました。この大学では種苗生産で使用するアルテミアの栄養学研究が行われていて、アルテミア世界市場の65%の販売をしているINVE株式会社とともに共同研究を行い、養殖の伸びが著しい中国、ベトナムなど東南アジア各国との連携に非常に高い関心を持っていました。

日本の栽培漁業は国の基本方針、各県の基本計画によって推進されてきました。EC各国は日本と基本姿勢が異なり、環境容量に対する考え方や遺伝的予防対応や生態系を十分配慮したうえで、栽培漁業を推進したいとの考えです。日本においても当然、上記の課題に対して十分注視して事業を推進しているところですが、現場での感覚は、事業を実施しながら、軌道修正を図る、順応的管理をしていると言ってもいいでしょう。

ところが、ヨーロッパ各国の姿勢は、とことん議論を整理したうえで、予防的対応を図ってからでないと行わない論理の世界です。やはり、ECそれぞれの国の歴史、地政学位置、思惑など交錯するなかで、言葉の定義をとことん明確にし、英文の校正を重ね、最終文案を2日間でまとめあげるエネルギーに感心しました。

日本では、事業が先行し、理論付けはあとづけの感があります。どちらが良い、悪いのではなく、国民性が如実に反映しています。

写真はこちらから

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p752393.html>

## ○ヒラメの金さん

近ごろ、街中においてタトゥーと称する入れ墨を腕や背中などに入れている若い人たちをたまに見かけることがあります。このタトゥーについては、いろいろな御意見があると思います。私などは入れ墨というと「遠山の金さん」をイメージしてしまう世代ですが・・・この場ではタトゥーの是非については触れません。

このような話題をどうして持ち出したかという、最近、当技術センターで飼育しているヒラメ達にもタトゥーをしている世代が増えてきているからです。

以前にこのメルマガ (No.136) において、ヒラメ親魚に対してピットタグという個体識別標識を装着して優良なヒラメを選抜していることをご紹介しましたが、このタトゥーは個体を識別するのではなく、系統を判別するために付けています。

各系統の耐病性や成長などの生物特性を把握するときに、飼育条件を揃えて調査することが必要です。このため、異なる系統を同一の水槽で混合飼育することが出来れば、各系統の生物特性をいっそう正確に把握することができます。そこで、このタトゥーを系統判別の目印としてヒラメの裏側（眼の無い側）に付けています。

この標識をヒラメに入れる作業ですが通常は二人で実施しています。一人が魚を押さえ付け、もう一人が注射針で標識を皮下に挿入していきます。このとき、ひっくり返して押さえ付けられたヒラメは、力いっぱい抵抗するためにしばしば自分の手に入れ墨を入れてしまいそうになることがあります。そのうち、私の手にも色鮮やかなタトゥーが彫られることになるかもしれません？

標識をつけたヒラメの写真↓

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p752478.html>

-----  
■水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）

■配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン196-1

ヨーロッパ各国における栽培漁業に対する対応



写真1 会議が開催されたベルギー、ブルージュ州会議場



写真2 会議場内部



写真3 会議前の緊張した面持ち



写真4 Ghent大学



写真5 Ghentのホテル前路面電車



写真6 Ghent大学 short seminar



写真7 今井の講演



写真8 討論

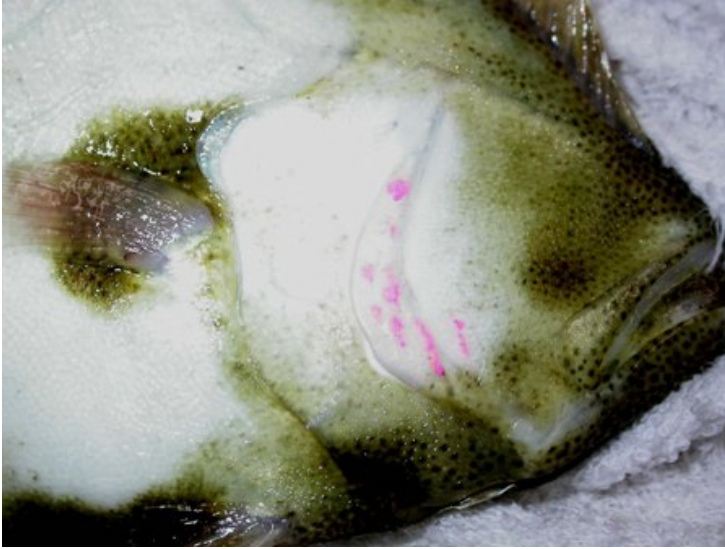
[記事に戻る](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン196-2

ヒラメの金さん



サクラ吹雪き？を付けたヒラメ

[記事に戻る](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メルマガ197

神奈川県水産技術センターメルマガ VOL.197 2007-05-25

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.197 2007-05-25

~~~~~

□研究員コラム

○仕事から (資源環境部 高田 啓一郎)

○最大で60cm、寿命は20年「イサキ」 (栽培技術部 沼田 武)

○仕事から

皆さんは、仕事を離れた時間でも仕事に関係のある物事を見たり聞いたりすると自然と注意が向いてしまうことがあると思います。私の仕事はもちろん水産関係ですので、旅行に行っても海を眺めていても、漁船が見えると「どんな漁法で何を獲っているのかな？」などという考えが頭に浮かんでしまいます。

最近、同じようなことが起きました。某テレビ局の山本勘助を主人公にしたドラマを見ていた時のことです。山本勘助がアワビの殻で作った眼帯をしているのですが、私は以前アワビの種苗生産や放流の仕事に携わっていたので、殻の形状から、そのアワビはマダカアワビという種類であろうことはすぐに分かりました。

問題はその後です。勘助が横を向いたときに「アレ」と思ったのです。殻の中心部（正しくは殻頂）周辺が白や緑色をしているように見えたのです。30号で照会されているように種苗生産したアワビの殻は緑色をしていて、海に放流されて成長してもその部分は緑色のままなので天然貝とすぐ区別できます。…とすると勘助の眼帯は、戦国時代に種苗生産・放流されたアワビ？

それ以降、このドラマを見ると、どうしても眼が勘助の眼帯を追ってしまいます。良いのか悪いのか分かりませんが「仕事から」とはこういうものでしょうか。

アワビの種苗生産や放流についてはこちらから↓

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p582807.html>

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p582868.html>

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p583014.html>

メルマガ30号はこちらから↓

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450011/p583084.html>

○最大で60cm、寿命は20年「イサキ」

相模の海には多種多様な魚介類が生息し、これら海の恵みによって多彩な漁業が営まれているとともに、多くの人たちが四季を通じて遊漁を楽しんでいる。

イサキは、本州中部以南から東シナ海にかけての沿岸岩礁帯に生息し、寿命が20年、最大で60cmにもなる大型魚であり、かつては春先から初夏にかけての一本釣漁業を支える重要な魚種であった。

そのころは、三浦半島剣崎沖の松輪瀬や城ヶ島沖、相模湾側佐島沖の亀城根のほか、相模湾奥の江ノ島沖、茅ヶ崎の烏帽子岩沖から平塚沖などに好漁場があり、主要な漁場であった松輪瀬では、イサキ狙いの職漁船が船団を成して操業していたと聞いている。

ところが、最近ほどの漁場でも大型のイサキは激減して一本釣漁業の対象ではなくなり、松輪瀬においても職漁船の出漁は皆無になった。

しかし、相模湾西湘地区（大磯から湯河原）の定置網には、毎年9から11月にかけて小型のイサキが大量に入網している。18年の同期には210トンもの漁獲があり、カマボコ原料として30円/kgほどで捌けることもあるようだが、値の張る魚とともに混獲されると邪魔者のごとく扱われる。

定置網での漁獲量は、湾内に加入するイサキ初期資源のごく一部であろうが、大半は湾内に留まらず何処かに消え去ってしまう。相模の海は住みにくくなったとも言え残して出て行くのか。

何もイサキに限ったことではないようだが。

[編集後記]

読者の方から、配信の日付けが正しくないとのこと指摘を受けています。ソフト会社と対策を検討中ですので、もう暫くお時間をいただきたいと思えます。ご不便をおかけして申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。

■水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
■配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガ198

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.198 2007-06-01

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.198 2007-06-01

~~~~~

## □研究員コラム

- 「平塚市漁協の漁場改善の取り組み」 (相模湾試験場 櫻井 繁)
- さかなの性格と飼育設備 (栽培技術部 原田 穰)

### ○「平塚市漁協の漁場改善の取り組み」

平塚周辺の海域は、相模川から粒度の細かな土砂の流入があることから、海底が固くなり、ゴカイ等の底生生物や魚介類の生息環境が悪化しています。

これらの底生生物は魚の主な餌となることから、平塚市漁協では、これらを増やすため、固くなった海底を柔らかくし、底生生物の生息環境を改善する試みを平成9年度から行っています。

この方法は、海底耕耘と言い、平塚市沖の水深5から10mの沿岸域を幅70cm、重さ40kgのつめの付いた大きなスキを漁船で引っ張り、海底を耕します。この時、後に網を取り付けて海底のたまったゴミも回収します。これを、春先の2月から4月にかけて、月1-2回程度実施しています。この取り組みで、ナガラミ(ダンベイキサゴ)などの貝類が少しずつ増えてきています。

このような取り組みを通じ、漁業者自ら自分達の漁場や環境を守るという意識を持ち始めたことは、素晴らしいことだと思っています。皆さんも、環境を守るために、不要になった物などを河川や海に捨てないよう心がけてください。

### ○さかなの性格と飼育設備

現在、水産技術センターにおいて、魚類ではヒラメとホシガレイの種苗生産に取り組んでいます。この2種は、見た目が非常に似ていますが、実際に育ててみると性質がまったく違うことがわかります。もちろん、孵化してからの形態の変化や成長度は当然違いますが、魚自体の行動もだいぶ異なっており、それにより、ヒラメを飼うのに使っていた設備や道具が、ホシガレイを飼うのには使えないなどの事態も発生してしまいます。

当センターでのホシガレイ種苗量産化の大きなネックのひとつが「底掃除」でした。ヒラメであれカレイであれ、魚を大量に飼っていれば、当然ながら池は汚れ、底に魚の糞や残餌がたまっていきます。小さな水槽であれば、サイフォンを利用して人力で掃除が可能ですが、大量生産用の大きな飼育水槽ではそうもいきません(因みに当センターには、底面積が38平方メートルのヒラメ飼育水槽が4基あります。)。そのため、当センターのような魚類種苗生産施設では、底を移動しながらポンプで水ごとゴミを吸い上げる「自動底掃除機」を設置して省力化を図っています。

ヒラメは生きた魚などを餌にしているためか、動きが素早く、底掃除機が接近してくると敏感に反応して退避します。ところが、ホシガレイは、逃げるところか、その場にじっとうずくまってしまうのです。敵が去るのを待つタイプなのか、こちらが近づいても動きません。これでは、自動底掃除機など使ったらほとんどゴミと一緒に吸われてしまうでしょう。

といった訳で、ホシガレイの場合は、やむなく、人力で慎重に1日数時間かけて掃除をしていたのです。これでは、使える飼育水槽も底面積3平方メートルのものがせいぜい2-3基で手一杯になってしまいます。また、掃除だけに多くの時間をとられ、他の仕事ができません。

困った挙句、今年は思い切って底掃除をほとんどしませんでした。しかし、普通に底掃除をしたところと、3ヶ月あまり掃除しなかったところの生残率は、ほとんど変わりませんでした。このことは、ホシガレイの種苗生産を発展させる、以外と大きなきっかけになるかもしれません。

[「ヒラメ飼育水槽の底掃除機」と「触っても逃げないホシガレイ\(成魚\)」の写真是こちらから](#)

- 
- 水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
  - 配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

---

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン198

さかなの性格と飼育設備



写真1 ヒラメ飼育水槽の底掃除機



写真2：触っても逃げないホシガレイ（成魚）

[記事に戻る](#)

**神奈川県**

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン199

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.199 2007-06-08

~~~~~

□研究員コラム

- 漁業者グループの紹介（その2）（相模湾試験場 中川 研）
- 人工衛星画像閲覧システムのバージョンアップ（資源環境部 樋田史郎）

○今回は、岩漁業協同組合の青年漁業者グループの取り組みについて紹介させていただきます。

真鶴町には、真鶴町漁業協同組合及び岩漁業協同組合の2漁協があります。岩漁協は、真鶴半島の東側に位置し、岩漁港を拠点として定置網漁業（組合自営）、一本釣り漁業、刺網漁業、裸潜り漁業などを営む漁業者で構成されています。

岩の地先には、磯根があり、カジメ等の海藻が繁茂した海の森が広がっており、サザエやアワビの漁場として漁業者が大切に管理しています。

岩漁協には、裸潜り漁の漁業者のグループの海士会や青年漁業者のグループである青年部等の漁業者グループが存在し、アワビやサザエ等の種苗の放流や中間育成の他、ヒオウギガイ養殖にも取り組んでいます。これらのグループの一員でもある青年漁業者がアワビの陸上養殖試験に取り組みはじめました。

アワビの養殖は、海上で行うか陸上の場合でも海水を取水して、かけ流しで行うものが多く、今回当グループが取り組む循環式（同じ海水を循環ろ過して使用する）で養殖を行っているところは、ほとんどありません。

そこで、アワビ種苗の生産や研究を行っている当センターの栽培技術部に視察研修を実施しました。その中で、やはり飼育水の水質が何よりも重要であることを学び、また、シェルターを配置することでアワビを落ち着かせることも教わりました。

そして、今年中に大きくなったアワビの一部を市場等へ出荷してみることになっています。どのような評価になるのか楽しみです。もしかすると数年後には、岩産の養殖アワビが店頭で並ぶかもしれません。そのときは、是非、買ってアワビステーキにして食べてくださいね。（私は食べたことがありません。アワビは高級品ですものね。）

また、新たな試験も開始しています。アワビの飼育水の水質を保つために何か良い方法はないか模索していたところ、メンバーの1人がテレビの情報番組で中国の河川水質を改善するため、納豆菌群をコンクリートに封入したブロックを見て、これが使えないかと考えました。

早速、会社を調べ、問い合わせたところ、貝類にどのような影響があるかは、調べていないのでわからないとの回答があり、その業者の協力でブロックの提供を受け、60cm水槽で比較実験を行うこととなりました。現在、その実験の真っ最中です。

今回は、岩漁業協同組合の青年漁業者のアワビ陸上養殖の取り組みについて、簡単に紹介させていただきました。我々普及指導員は、今回の若い漁業者達のように、自ら積極的に新たな挑戦をしている漁業者を陰から応援、サポートしています。

また、このような漁業者グループの活動について、もっと皆様に知ってもらい、神奈川県の漁業についてもっと深く理解していただけたらと思っています。

[「アワビの陸上養殖試験」と「納豆菌群封入ブロックの影響試験」の写真はこちらから](#)

○人工衛星画像閲覧システムのバージョンアップ

ホームページの海況コンテンツをご利用くださりありがとうございます。海況図は非常に多くの皆様にご利用いただいておりますが、人工衛星画像は当所の中では人気コンテンツであるものの海況図と比べると利用状況はだいぶ低いです。これの一因に、閲覧の不便さがあるものと認識しています。このたびこの不便さを解消しましたので、その舞台裏を紹介します。

海況のコンテンツは、漁業者をはじめ県民の皆様に使っていただくことを考慮していますが、日常の海況調査の業務で担当者自身が使えることを裏側のコンセプトとして重視しています。例えば、一都三県漁海況速報をサムネールで表示したり、同じ日

付の他種の図を境目なく閲覧したり、これらはみんな海況調査の必要から発生したページ設計です。

そんななか、もどかしかったのがNOAA人工衛星画像のページでした。伊豆諸島と黒潮域の図については、1日合成画像を縮小した画像を一部三県漁海況速報と同様の画像データベースとしてまとめましたが、海況調査で使うには、1.1kmの衛星が捉える解像度をフルに活かした詳細の1パス画像がどうしても必要です。

衛星画像を作るおおもとの受信解析システムが担当者の席のそばにあり、そこでは水温の色分けなど他ではできない高度な作業ができるのですが、他のデータと並べたりといった作業はできません。受信解析システムが逐次出力する画像をパソコンで閲覧して作業をしていますが、衛星画像は雲の影響で利用価値が大きく変化するため、どの日時の画像が使いものになるか見本を一覧したいものの、海域・日時がバラバラの図を定型的に眺め難く不便でした。もちろん、従来のホームページで公開していたNOAA人工衛星画像のページがその役割を果たす筈だったのですが。

ホームページのデータを処理しているサーバーが老朽化したため、段階的に新しいサーバーへの引っ越し作業を行なってきました。ホームページ担当が管理している部分については「ちょっとコピーするだけ」ですが、問題は海況調査が管理している海況関係の自動処理システムの引っ越しでした。通常海況データや海況図は、いろいろとシステムが複雑なのですが、担当者用マニュアルをみながら順調に引っ越しを完了しました。さて、一番の難物はNOAA人工衛星画像のページの処理システムで、中身をほとんど全部作りなおしました。

1日に保存される衛星画像の合計サイズは、十数MBです。しかし、衛星が飛来する毎に再処理される合成画像の出力を入れると、1日の転送量は50MB近いサイズになります。現在のインターネットの通信インフラでは取るに足りないサイズですが、衛星画像の提供を開始した頃のインフラでは1日に転送可能な帯域の2割近くを占有してしまい、衛星を受信した直後の転送ピーク時にはメールほか所内職員のインターネット利用ができなくなってしまう。

そこで、合成画像は、逐次更新ではなく世界標準時の1日経過後に1日分を更新する等の処理で限られた通信帯域をやりくりしていました。また、ホームページの実際の公開場所である平塚にある農林水産情報センターのサーバーの容量が限られ、1週間分の画像しか公開場所に置けなかったため、古い画像を消す等の処理を遠隔操作で行なっていました。しかし、世界標準時と日本時間の境目の処理で失敗する不調が多く発生するようになり、「未受信または受信なし」のアイコンが目立つようになりました。さらには、サーバーの引っ越し作業中の他のコンテンツの転送処理が干渉し、4月に画像の更新が止ってしまい、最早一刻の猶予もなくなりました。

新しいシステムでは、パス画像に時刻の情報を持たせて、日付時刻に基づいて処理するようになりました。これに伴って、日本時間を基準として見本画像を並べられるようになりました。そして何より安定して動くようになり、海況担当者自らが1日に何度も(所内サーバーの同一コンテンツを)閲覧して海況調査の事業に役立てています。皆様のご利用・ご活用をお待ちしております。

※[新しいシステムによる衛星画像のページ](#)

※[本記事の説明ページ](#)

■ 水総研メールマガジン（毎週金曜日発行）
■ 配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン200

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.200 2007-06-15

~~~~~

## □研究員コラム

○カエル（資源環境部 岡部 久）

○「さかなグッズ」コレクション（その12） 雑ものIII（管理部 亀井 正法）

## ○カエル

近年、環境汚染などの影響により、世界中のカエルの数が減少しているとの報告があると聞きました。カエルといえば、私が生まれ育った川崎の北部には田園地帯が残っており、春になるとトノサマガエル（トウキョウダルマガエルかもしれません）やアカガエル、ツチガエル（イボガエルと呼んでました）、アマガエルなどが盛んに鳴いていました。

先日、子供が学校でカエルを飼いたいというので、カエルの親は生きた餌をやりつづけるなど、世話が大変だから、卵やオタマジャクシを捕まえてカエルになるまで飼って、取った場所に逃がしてやったらどうかとアドバイスし、週末にカエルを探しに三浦市内を探索しました。

意外なことにカエルが見つかりません。アマガエルがたくさん卵を産む場所は知っていたのですが、他のカエルが見せたくて、車であちこち回ったのですが…。結局見つけたのは、農業用水の中でじっとしている巨大なオタマとその親。

近くのため池には大きくなったミドリガメにブラックバスを狙ったルアーマンの姿。餌釣りのおじさんは「ブルーギルがつれるよ」とのこと……。日本の里山はどこへいったのやら。少々驚くとともに、残念な気持ちでした。

最後に立ち寄った池でアカガエルと思われるオタマを見つけ、ようやくほっとしました。某所のアマガエルと共に、いつまでも姿が見られることを祈ります。

東京湾でも、多様な生き物が生活する干潟やアマモ場などが少なくなっていました。子供たちにとって自然と触れ合う機会を持つことは大切なことだと思うのですが。

○「さかなグッズ」コレクション（その12） 雑ものIII

今、さかなグッズコレクションをあらためて整理する中、やたら食器や、キッチン関係のものが、圧倒的に多いのに気づかれます。それと言うのも、私が食べ物や料理に執着しているせいでしょうか。今回は、キッチンから離れて、スリッパ、ライター、一輪差し、灰皿を紹介します。

雑もの中で以外と多いのが、スリッパです。しかも、安価で量販店で、しばしば見つけることができます。

スリッパコーナーは、私にとって密かな楽しみで、必ず漁りにゆくところです。フローリング用もちろん、トイレ用、台所用と賢沢に？使っているのですが、そんなに消耗するものではないので、コレクションはたまる一方です。

私は喫煙しませんが、ライター収集も楽しいものです。しかし、なかなか見当たらないので、それだけに見つけた時の喜びは大変なものです。紹介するものは、当然、すべて火がつきますが、その火のつき方が趣きがあるのです。私のお気に入りには、サメのライターで、腹部を親指で押すと口が開いて、眼がブルーに光りながら、炎を吹き出すものです。ちょっと、タバコをくわえてみようかなと、思いたくなる一品です。

「一輪差し」で、いまだに気になっているのが、一見マゴチ風に見えるこの一品です。これは、忘れもしません埼玉県越生の「道の駅」で出会ったのです。見つけた途端、形と言ひ色合と言ひ、気に入らして、即、購入しました。でも、ふと思ったのです。これを造った人は、何の魚をモデルにこしらえたのかと。私は一見、マゴチだと思ったのですが、よく考えれば埼玉県は「海無し県」ですから、もしかすると淡水産カジカがモデルではないか？。製品は、かなりデフォルメされているので、背びれ、腹びれ、尻びれが見当たりありません。ただ、下唇が上唇より突き出ているところから、私にはどうしてもマゴチもどきに見えるのです。できるなら製作者に訊いてみたいと思っています。

こんな、どうでもよいことが、気になるのも私が魚のプロであるゆえの悲しい性なのでしょう。

※[写真はこちらから](#)

---

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）  
■配信の変更、解除は、[こちらから](#)↓  
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

---

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。



# 神奈川県水産技術センター メルマガ201

神奈川県水産技術センターメルマガ VOL.201 2007-06-22

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.201 2007-06-22

~~~~~

□研究員コラム

○たこ（栽培技術部 照井 方舟）

○トラフグの放流（栽培技術部 武富 正和）

○たこ

たこ、タコ、蛸、鮑、章魚、鱒…

以前にご紹介しましたアワビ資源回復計画では、アワビ種苗を放流しています。

（漁業者の方が禁漁区を設定、そこにアワビ種苗を放流し、親貝密度を上げ、将来的にアワビ資源の増大を図るという壮大な計画）

放流後の小さなアワビの天敵は、ヒトデ、カニ、タコ、魚など多数いますが、今年はタコが多くて困っています。

タコは年によって資源の変動が大きく、数年に一度大発生することがあります。漁師さん達は、この大発生のことを「湧く」と言っていますが、今年はちょうど当たり年だったようです。

放流後の追跡調査で潜ると、あちこちでタコが目につきます。タコは獲物を巣穴に持ち帰って食べるらしく、巣穴の周りには貝殻やカニ殻が散らばっています。放流アワビの殻が大量に散らばっているとがっかりです。その奥にタコの黄色く光る目が見え「ご馳走さまっ！」って言っているようで、余計腹が立ちます。

写真1 タコの巣（貝殻が散らばっている） 写真2 放流アワビ（殻が緑色）に手をかけるタコ

漁師さんたちにも「アワビ放流場所では、重点的にタコを獲ってください。」とお願いしていますが、「アワビ食ってるようなヤツあ、餌がイワシの蛸壺じゃ獲れねえよ。」なんて言われます。タコは他にもイセエビを食べます。アワビにイセエビ、なんて贅沢な奴なんでしょう。

タコは、昔から日本ではユーモラスな可愛いキャラクターとして人気があります。一方、西洋では悪魔として嫌われています。私の中では今までは前者として大好きでしたが、今は大嫌いになりました。憎っくき「タコめ！」です。（タコ漁業者の方、ごめんなさい。）

最近、私はタコの消費に努めています。回転寿司でもタコを食べるようにしています。（もっとも私が行くような安い店では、輸入物のタコでしょうけど…）

タコの消費が伸び、タコの価格が上がり、タコの漁獲が増える事を期待しています。

なお、本県沿岸の大部分の海域では、共同漁業権の内容に「たこ漁業」が入っており、漁業者でない方がタコを採ることはできませんので、念のため。

○トラフグの放流

6月19日、横須賀の猿島周辺でトラフグ種苗を放流しました。このトラフグは、(独)水産総合研究センター南伊豆栽培漁業センターが今年の4月始めに採卵し、6月まで同センターの水槽で育てた全長約4cmの種苗約5万尾で、神奈川県水産技術センターが東京湾での成長や移動の状況を調査するため譲り受けたものです。

当日の午後1時、伊豆の石廊崎からトラフグを運んできた活魚車2台が横須賀の平成港に到着すると、岸壁に横付けされていた横須賀市東部漁協所属の第3柴信丸、第2清丸の2隻の漁船にトラフグ種苗を積み込み、船で数分の場所に放流しました。

海面に放流されると、大方のトラフグは直ぐに底を目指してすいすいと泳いでいきました。しかし、水面には、海水と空気を吸い込んで腹を膨らませ、白いお腹を浮かせたトラフグが数匹残されました。

丁度、丸い風船を膨らませて手を離すと、くるくる空を回って飛んでいくように、トラフグは呑み込んだ海水を吐き出しながら水面をぐるぐる回り沈んでいきました。中にはそのまま浮いているフグもいて、見かねた漁師さんがタモの端で白いお腹をさわると、思い出したように回り始め、海底に向かって泳ぎ始めました。

これまで、マダイ、ヒラメ、カレイなど随分いろんな魚を放流してきましたが、こんなとぼけたシーンに出会ったのは初めてです。

通常、弱った魚などが水面にいと、どこからともなく海鳥がやってきて、これらの魚を捕っていくのですが、相手が猛毒を持ったフグと知ってか、この日は1羽のカモメもやって来ませんでした。

今回放流したトラフグは、1年後には30cm前後にまで成長しますが、今年の秋口には、丁度、投げ釣りの外道として有名なクサフグと同じ様な大きさになります。もし、体側に大きな黒い斑点のあるフグを釣り上げるようなことがあったら、是非、海に戻してあげてください。きっと、水面でくるくる回り、皆さんにお礼の挨拶をしてくれることでしょう。

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
■配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン201

たこ



写真1 タコの巣



写真2 アワビに手をかけているタコ

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガ202

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.202 2007-06-29

-- Fish-mag >°))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.202 2007-06-29

~~~~~

## □研究員コラム

○相模丸顕彰碑について (所長 今井利為)

○あなご学うんちく (5) (資源環境部 清水 詢道)

### ○相模丸顕彰碑について

城ヶ島の水産技術センターの門に入って右側の場所に“相模丸顕彰碑”が東方に向かって建っています。

この碑は、昭和16年第二次世界大戦が開戦されるや、いち早く海軍に徴用され、本邦東方海上の哨戒にあたっていて昭和18年6月18日、アメリカの潜水艦に撃沈された第二代相模丸を顕彰したものです。

梅雨の晴れ間で太陽が燦々とそそいでいた平成19年6月18日に、老夫婦がこの碑に御参りに来られました。第二相模丸の船長であった岡田船長の次男の方で、花束を碑前に捧げ、お祈りをされていました。

この花束の外、もう一束がありましたが、どなたが捧げられたか確認していません。殉職された乗組員のご家族が64年経った今日も冥福を祈る姿はとても印象的で、平和の大切さを感じた次第です。

第二相模丸は、昭和5年に建造された135トンの遠洋漁業指導船で、岡田船長以下21名が乗り組み、鯉釣漁業試験では臨時漁夫23名が加わり漁獲試験を行っていました。鮪釣漁業試験では北海道方面の室蘭、浦河、釧路の漁場の外、色丹島から択捉島方面に行き好漁獲を揚げ、民間船に指針を示すことで業界発展に多大な貢献をしました。

相模丸は、戦後、三代目から六代目まで建造されましたが、200海里の制定に伴い、平成6年に神奈川県として遠洋漁業の漁獲調査から撤退しました。

三崎の鮪船が全国の漁船に先駆けて大西洋、インド洋に進出し、遠洋漁業の基地としての三崎港の礎を築くことができたのも、進取の気概があった沢山の方々の勇気、知恵、工夫、苦勞、犠牲があったからだと思えます。

### [相模丸の写真はこちらから](#)

### ○ あなご学うんちく (5)

さて、いよいよマアナゴの生態学に話題は移ります。マアナゴの生態は謎だらけ！その中でも最大の謎は産卵に関する部分です。マアナゴの産卵場について最初に記載された論文は1959年に水産大学校の高井さんが書いたもので、そこには、北緯25°以北の、深海が沿岸に接近した黒潮本流あるいはその支流水域と思われる、とあります。

この説の欠点は物的証拠がないことですが、長い間定説となっていました。最近でも、東シナ海の大陸棚の縁辺部が有力、と考えている人もいます。これは漁獲状況を分析した上の結論で、物的証拠（たとえば成熟した親を採集したとか、生まれたての仔魚を採集したとか）がないとしても有力な説です。しかも、高井さんの考えとほぼ同じです。生まれたての仔魚の採集に成功した九州大学の望岡さんは、駿河湾周辺海域も産卵場の可能性があると述べています。

ウナギの産卵場を特定した東京大学海洋研究所の塚本さんたちのグループは、遺伝学的な研究から、日本のマアナゴ資源は基本的には単一の集団として存在するけれど、いくつかの地域集団に分かれていて、その地域ごとに再生産している、と考えています。このことは、地域ごとに産卵場が存在する可能性を示しています。

いずれにしても、産卵場を明らかにするための物的証拠がとても乏しい状態なのです。また、マアナゴは一生に一回産卵すると考えられてきましたが、愛知県渥美半島にある (株) いろいろ研究所の宇藤さんは一生に複数回産卵する可能性があることを

明らかにしました。

だとすると、産卵が終わった状態のマアナゴが次の産卵のために待機しているわけで、普通そのような状態の魚は活発に餌を食べるでしょうから、場所と時期さえ間違えなければ、物的証拠を手に入れることができるのでは、と考えてしまいます。

是非やってみたい、でもどこで調査すればいいの？そこが大問題ですよ。

産卵期については、沿岸にやってきた仔魚から知ることができます。このコラムでも何度か紹介されていますが、脳の中にある耳石を取り出して、そこにあるリング（日周輪）を数えれば、その数が孵化してからの日数を表すので、逆算すれば産まれた日がわかるわけです。

これまでに、東京湾に入口で採集した仔魚の耳石を観察した結果から、産卵期は秋から冬と考えられました。でも、どこで？問題はもとにもどってしまいます。

-----  
■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）  
■配信の変更、解除は、こちらから↓  
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

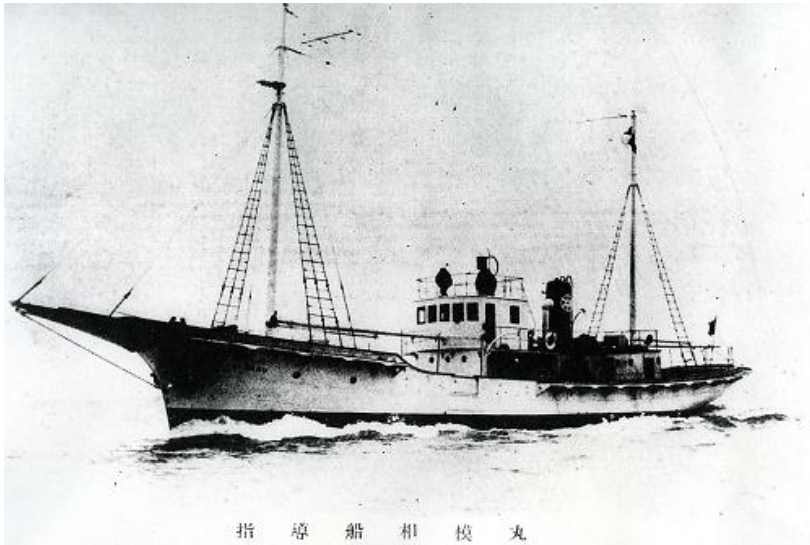
-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン202

相模丸の顕彰碑について



相模丸

[記事に戻る](#)

**神奈川県**

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン203

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.203 2007-07-06

~~~~~

□研究員コラム

○ベンケイ（企画経営部 清水 顕太郎）

○子安の運河へのアマモ移植（栽培技術部 工藤 孝浩）

○ベンケイ

当水産技術センターがある、三浦市三崎周辺では現在メトイカが釣れています。水産技術センターへの通勤は城ヶ島大橋を渡るのですが、城ヶ島の東側に遊漁船が集まってメトイカを釣っているのが大橋の上から見えます。毎日結構な隻数の船が集まって釣っていますので、「私の釣る分は残しておいてねー」などと勝手なことを考えてしまうくらい、皆さんがんばっています。

「メトイカ」とは、ケンサキイカの三崎での呼び名です。釣り雑誌などでは「マルイカ」と呼ばれることが多いようです。当センターのホームページに「市場を歩く」というコンテンツがあります。その筆者の一人である中村さんによれば、ケンサキイカの幼体を「メトイカ」、成体を「マルイカ」と呼ぶそうですが、私の周りの人たちはどのサイズのものももっぱら「メトイカ」と呼んでいます。

メトイカを釣っていると、「ムギイカ」と呼ばれるスルメイカの幼体も釣れてきます。ムギイカはいくぶん長さの割に細いかな・・・と感じるものの、皆さんおなじみのスルメイカの体型をしています。ちなみに、諸説あるようですが、一説には「ムギイカ」とは麦の穂が出る時期に獲れるため、ムギイカと呼ばれるのだそうです。

一方、メトイカは同じ長さのムギイカより胴が太く、ムギイカと比べると丸く見えます。もちろん、コウイカやカミナリイカほどではありませんが、ムギイカと比べると「丸いな・・・」という印象です。このため「マルイカ」とも呼ばれるのでしょね。

さて、このメトイカですが、特に大型のものを「ベンケイ」と呼ぶそうです。（「メトイカ」の名前の由来もよくわからないのですが）『なぜ、「ベンケイ」と呼ぶの？』とメトイカ釣りに連れて行ってくれる知人に聞いてみたのですが、「昔っからベンケイで、由来など知らない」とのことでした。本メルマガの読者の皆様の中で、もし、「メトイカ」や「ベンケイ」の由来をご存じの方がいらっしゃいましたら、お教え願えませんでしょうか？

[「市場を歩く」のメトイカの記事](#)

○子安の運河へのアマモ移植

横浜駅からわずか5kmほどしか離れていない首都高速の陰の運河沿いに、少年時代の1970年代にタイムスリップしたかの様な不思議な空間があります。多数の栈橋が無秩序にせり出し、漁船とプレジャーボートが入り混じって係留され、古びた作業小屋や物置きが猥雑に立ち並んでいます。

そこは、江戸時代から栄えた由緒ある漁村、子安です。周辺が京浜工業地帯として大々的に埋め立てられ、地先の漁場を失った後も、底びき網で東京湾の沖合一帯を席卷し、シャコ、アナゴやカレイなどを水揚げしていた勇壮な漁師の町です。

しかし、1971年に横浜市以北の漁業権が全面放棄させられると、子安の漁師たちの多くは転業政策に従って陸に上がりました。子安にほど近い地で生まれ育ち、水産行政に身を置く私は、歴史の流れの中で忘れ去られてしまったかのような子安がふびんでなりません。

今なお、多くのアナゴやスズキなどが活魚で水揚げされ、若い漁師もいるのにと。

昨年度、アマモ場再生を東京湾に広く展開しようとする事業が始まりました。アマモ場再生に取り組む自治体やNPOなどに、県がアマモの種苗や再生技術などを無償で支援するものです。そこに、山下公園の海底清掃を26年間続けてきた「海をつくる

会」が、「子安にアマモを移植したい」と名乗り出てきました。同会事務局長の坂本昭夫さんも、子安の近くで生まれ育ち、地元の海の再生に並々ならぬ情熱を燃やしています。

前例のない運河へのアマモ移植をめぐり、許認可の手続きは3ヶ月を要しましたが、坂本さんの粘り強い交渉と調整の結果、当センターと子安の漁協（横浜東漁業協同組合）が共催して7月1日9時にアマモ移植イベントが開催されました。参加者は漁業者11名を含む50余名。まず、運河に累々と沈んでいるゴミを片付けなければなりません。

海をつくる会や我々水産関係者が膝まで潜り込む最前線にウエットスーツや胴長靴で立ちこみ、硫化水素臭を放つゴミを次々と引き揚げます。自転車、椅子、流し台、傘や鉄パイプ。横浜市大の女子学生たちは、ヘド口による服や身体の汚れをいとわずに額に汗してゴミをリレーします。最後にゴミを受け取る漁業者たちは、何だかとても嬉しそうです。

1時間の作業で4トンものゴミを引き揚げました。まだまだ取り残しはあったのですが、参加者の体力は限界と判断し休憩をとりました。

干潮の11時から移植の開始です。前日に金沢区の野島海岸から採取したアマモ400株に、200個の粘土と100本の竹串を装着して、田植えのように1株ずつ植えつけます。移植した区画は、21m×3mの63平方メートルでした。

子安の海の再生のために駆けつけ、無償で汗を流す多くの市民の姿に、私と同級生の組合長はいたく感激し、全員分のシウマイ弁当と冷たい飲み物を用意してくれました。皆は漁師の心意気に感謝し、心の交流が生まれました。

実は、複数の漁師から「アマモを植えるならもっといい場所がある」との話をいただき、イベント開始前に漁船で案内してもらいました。地元漁師から声がかかるこうした展開こそ、まさに我々が望んでいたものでした。この日は、アマモ場再生が新たな一歩を踏み出した記念すべき日となるでしょう。

[写真はこちらから](#)

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）

■配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガ204

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.204 2007-07-13

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.204 2007-07-13

~~~~~

## □研究員コラム

○トビウオが飛び始めました (相模湾試験場 石黒 雄一)

○定置網の側張り敷設 (相模湾試験場 石戸谷 博範)

### ○トビウオが飛び始めました

定置網の漁獲物にトビウオが多く見られるようになってきました。市場に並んでいる姿を見ると、「夏が近づいてきたなー」なんて感じます。

定置網に入るということは、相模湾沿岸にトビウオがやってくるということ。この時期、調査船で沖を航行していると、トビウオが飛んでいる姿を目にすることができます。

船のエンジン音に驚くのか、それとも波を砕いて進む時の音に驚くのか、船の近くから突然海面上にトビウオが飛び出し、海面すれすれをグライダーのように、翼（胸鰭）をひろげ「すーっ」と、飛んでいきます。海面から飛び出す力、空中を滑空する技術、そして水中を遊泳する、そんなトビウオの能力に感心する今日この頃です。

下に空中に出て飛んでいるトビウオの写真を掲載しました。わかりにくいですが一応、飛んでいるトビウオです。

[写真はここから](#)

### ○定置網の側張り敷設

定置網の基礎構造物である側張りは、一度敷設すると5年を越える期間、そのままの状態でお作業する。網は、汚れ具合により7日から5ヶ月毎に交換するが、側張りは常時、海中にあって網を展開する役割を果たす。写真1は海面に浮いた垣網の側張りであり、ロープと浮子で構成され、海中でそれらが移動しないように固定するのが写真2の土俵である。

土俵は、化学繊維の袋に比重のなるべく大きい砂礫を詰めたもので、従来は重量50kg/個であったが、最近では500kg/個(写真2)～1t/個を用いることが多くなっている。

この土俵を1箇所に30個ほど、合計1000個以上使って、定置網が流れないように、しっかりと海底に固定している。

流速2ノットの急潮が発生しても、びくともしないように、安全を重視して設計している。（平塚市沖、日海丸漁場の張り立て作業より 2007.4.24）急潮や台風の時化にも耐えて、大漁満足されることを願います。

[写真はここから](#)

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）

■配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン204-1

トビウオが飛び始めました



写真1 海面のトビウオ

[記事に戻る](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン204-2

定置網の側張り敷設



写真1 垣網の側張り

写真1 垣網の側張り



写真2 固定用500kg土俵

写真2 固定用500KGの土俵

[記事に戻る](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メルマガ205

神奈川県水産技術センターメルマガ VOL.205 2007-07-20

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.205 2007-07-20

~~~~~

□研究員コラム

○海で働く宿命 (相模湾試験場 木下 淳司)

○海藻おしば教室に向けて奮闘中 (相模湾試験場 場長 川原 浩)

○海で働く宿命

水産技術センターに職を得て潜水調査をはじめた時、漠然と思った。いつか自分は海でホトケ様に会おうだろう。その時、正しく対応できるだろうか？意外にもその時は早くやってきた。

潜りはじめて4年目の春、水はまだ冷たかった。透明度は6-7mだったろうか。自分たちは藻場のモニタリングをしていた。調査項目を終了し、ゆっくり藻場の中を観察しながら進んでいた。その瞬間は今でも鮮明に記憶している。靴が落ちてる・・・靴には脚が付いている？・・・うわあ◎×▲※！！ホトケはまだ新しかった。

逃げるか？まずそれが脳裏をよぎった。しかしこの藻場は自分の研究のホームグラウンド。見捨てたら次から怖くて潜れない。引き上げよう。覚悟を決めた。浮上して海上で待機していた船外機を呼んだ。その時の僕の叫び声は調査船うしおの語り草となった。「センチョー！ドザエモン！！」

船長はロープを取り出しホトケの脚に結んで来いと言った。船外機で浜に上げるのだ。僕はロープを手に彼のもとへ進んだ。心臓がバクバクして胃が痛い。

震える手で脚に確実に結んだ。再び浮上して船長に合図した。しかしロープはするすると軽く上がり、その先に彼は居なかった。じつは2本のロープを結び合わせて1本にした結び目を、パニック状態であった僕はロープが絡まったと思い込み、水中で解いてしまったのだ。情けない。しょせんその程度であった。

結局同僚と3人で再び潜り、彼にロープをたすきがけして、船外機で浜に上げた。警察官がたくさん来て彼を運んでいった。

今でも不思議に思うのは、その日の調査場所はホトケから100m以上も離れていたのだ。普通は調査が終わるとすぐに浮上するのだが、その日は引き寄せられるように進んでいった。冷たい海の中で、彼の最後の願いが通じたのかもしれない。

その後新しいホトケ様とは出会っていない。“ニアミス”は時々あるようだ。子供のころ怖がりだった僕に母は言った。

「おぼけは噛み付いたりしない。一番怖いのは人間！」名言である。ホトケも噛み付いたりしない。潜水で一番怖いのはパニックになることだ。

海が濁っているとき、シケてきそうなとき、初めての場所。正直潜りたくない時がある。そんな自分であるが、ホトケ様から逃げなかったことがココロの支えとなり、今でも調査を続けられている気がする。

最後に月並みですが、これから夏を迎えます。海での遊びはくれぐれも気をつけて下さいませ。

○海藻おしば教室に向けて奮闘中

昨年当場に最新の自航式水中ビデオカメラ（ROV）が入り、カジメの藻場調査等に利用し始めたことから今年度8月5日の「小田原みなとまつり」とこれに引き続き行う当場のサイエンスマーでこの成果や藻場の大切さを広く知ってもらおうと海藻おしば作品展と子供達の海藻おしば教室を計画した。

以前、海藻デザイナーの野田三千代先生の海藻おしばに触れ、海藻の繊細な造形とカラフルな色彩に驚いた。きっと子供たちも関心を持ってくれるにちがいない。

しかし、海藻についてはコンブ・ワカメなどの水産有用種を除けば皆素人同然。教室開催にはかなり不安がある。先生の開催している「海藻おしば教室」にも入り、懇切丁寧な実技指導を受け、展示用作品の提供もして頂けることとなった。

開催に向けて何よりも必要なのは材料の海藻である。先生は海に生えている海藻を採ってくるのではなく、海岸に打ち上げられた海藻を使うことを薦めているが、我々が動き出したのは採集適期の春先をとくに過ぎた6月であり、これが一番の課題と思われた。

褐藻、紅藻、緑藻を同じ種類で100名分ほど用意しなければならない。大潮時に県下の岩礁を歩き採集したが褐藻が多く、なかなか綺麗な紅藻類が集まらない。

先生から伊豆の赤沢の海藻収集スポットにまだ打ち上げているとの情報を頂き、台風4号のあとに行ってみた。漁港の片隅に海藻が打ち上げられており、カジメなどの褐藻の固まりをかき分けるとトサカノリ、ユカリなどの目当ての紅藻がかなり混じっている。

これまで打ち上がった海藻はどこか汚いでこんなによく見たことはなかったが、中にはハッとするような綺麗なのを発見したときは宝物でも見つけたような嬉しさがこみ上げた。後で名前を調べるのが大変だと思いつつ手当たり次第に夢中で集め、1時間ほどで大きなゴミ袋一杯になった。

いま、案の定、集めた海藻の名前調べに手を焼いている。図鑑を見ても種の特徴がいまいち分からない上に先生によると同種でも海域で形状や色に違いがあるとのこと。ほかにも材料の選別、塩抜き、色落ち防止作業、作品展示用の説明パネルの作成等なかなかの作業が待っている。

陸の植物を使った押し花は生花の美しさには劣ると思うが、海藻おしばは海中生活に合った体を支える堅い茎等を持たず体の大半が薄い葉であることから、台紙に密着し易く、本来の繊細な姿を表現でき、カラフルな色彩と重なりによる微妙な色の変化が生海藻以上の魅力を引き出していると思う。海藻アートという言い方に納得している。

何とか子供達にこの海藻の魅力を伝え、海藻が生きている海の環境保全に関心を持ってもらえることを思い、後2週間頑張ろうと思う。

これをご覧になった皆様もどんな展示と教室になっているか、子供達の夏休みの作品づくりと併せておいで下さい。

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
■配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン206

-- Fish-mag >°)))< -----

／KN／ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.206 2007-07-27

~~~~~

## □ 研究員コラム

○ 謎の物体 (内水面試験場 原 日出夫)

○ 鮎の釣りも色々です (内水面試験場 相澤 康)

## ○ 謎の物体

先日、「河原で直径30cmくらいのゼリー状の卵を見つけた。長年ここで釣りをしているが見たことない。これは何か？もしかしたら、世紀の大発見ではないか。」との連絡を頂きました。「卵」で思い当たる生物はありませんでしたが、「直径30cm」, 「ゼリー状」のキーワードで「アレ」かな？という心当たりがありました。

別の研究員に聞いたところ、「アレ」ですよ。かなり前にも聞かれたことがありますとのこと。しかし、2人とも「アレ」をイメージできるのですが、名前ができません。名前が出ないことには詳細な情報を調べることもできません。関連しそうなキーワードを駆使して検索した結果・・・「コレ」だ！「オオマリコケムシ」(写真)！

ゼリー状の物体は、北米原産の1.5mmほどのコケムシの群体で直径50センチメートルほどにもなるそうです。餌は水中の微生物や有機物であり、他の生物への悪影響はない模様です。30年近く前から国内の各地で騒動を起こしているようです。

それにしても、近所の川にこんな物体が出現したらびっくりしますよね。

[写真はこちらから](#)

## ○ 鮎の釣りも色々です

鮎釣りといえば、友釣りが有名です。鮎の主な餌は河床の石のコケ(藻類)なので、コケがよく生える石の周りを縄張として、他の鮎がそこに迷い込むと、追い払おうとします。そこでオトリ鮎を縄張に泳がして追い払おうと向かってきた縄張鮎を釣り上げる、これが友釣です。

でも友釣は、難しそうだし道具も高い。もっと、気楽に楽しめる鮎の釣り方はないか、そんな希望をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。

そこで、お勧めなのが、毛針釣。コケを主食としている鮎ですが、羽虫を模した毛針でも釣れるんですね。私の調査フィールドの早川は、友釣の他に毛針釣も楽しめる川です。型は小振りですが、数がたくさん釣れるのは、友釣よりもむしろ毛針釣です。仕掛けはシンプル、竿も短めで、その手軽さからか、熟年のご夫婦やご家族で楽しんでいる様子をよく見かけます。

では、実際の釣果の方はどうでしょうか？解禁直後には200-300尾釣り上げる強者(つわもの)もいますが、これは解禁直後なので特別。少し釣れ具合が落ち着いてきた時期に、毛針釣で採集を行ってみると、だいたい0-50尾程度でしょうか。それにしても0-50尾とは随分幅があります。そこはやはり腕の差なんですね。

いつも調査にご協力をいただいている早川河川漁協の名人やインストラクターの先生方は50尾。一方、試験場の調査員は0尾、なんてこともしばしばでした。ところが2-3年も調査を続けていくうちに、秘技を伝授され調査員も腕が上がって、最近では同じ桁まで釣れるようになってきました。まさに、0(ゼロ)からのスタートです。

調査では釣れた鮎は成長や由来を調べたための標本とするので、残念ながら食べることはできません。釣人はきれいな清流の景色を楽しみながら自ら釣った鮎を、塩焼き、てんぷら、唐揚で食味も楽しむ、これは格別なんですよね・・・多分・・・、(試験場では全部標本にしてしまうので、食べたことはありませんが・・・)。

■ 水技Cメールマガジン(毎週金曜日発行)

■ 配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。



# 神奈川県水産技術センター メールマガ207

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.207 2007-08-03

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.207 2007-08-03

~~~~~

□研究員コラム

○「♪もしもしカメよー♪」 (内水面試験場 蓑宮 敦)

○円筒型孵化器によるアユ卵の管理 (内水面試験場 相川 英明)

○「♪もしもしカメよー♪」

童謡にもあるように、日本人にとってカメは、とても馴染みの深い生き物です。また、「鶴は千年、亀は万年」と言われ、縁起の良い生き物としても知られています。

相模川などで行っている魚類調査では、カメが時折採捕されます。川にカメがいても特に変ではないのですが、採捕されるカメの殆どは、ミシシッピーアカミミガメという外国産のものです（聞き慣れない名前かもしれませんが、あのミドリガメのことですよ!）。

飼いきれなくなったペットを捨てる無責任な行為が大問題なのは勿論ですが、とりわけここでの問題は、採捕後の処置になります。外来種（移入種）なので、再び放流することはできませんし、標本にするのも心が痛みます。仕方が無いので、甲羅の大きさと体重を測定した後に、試験場のカメ池へ収容しています。

こうした“時折の採捕”が繰り返された結果、試験場のカメ池はミドリガメだらけになってしまいました。もしもしカメさん、もうこの池では窮屈そうですね（彼らに罪はなく、むしろ被害者なのです。）（写真）。

[写真はこちらから](#)

○円筒型孵化器によるアユ卵の管理

放流事業に用いられるアユは、親魚養成とアユ種卵の供給は内水面試験場が、種苗生産は神奈川県内水面種苗生産施設が行っています。昨年度から神奈川県内水面種苗生産施設が新たに円筒型孵化器を導入しましたので、孵化器によるアユの孵化管理について紹介させていただきます。

従来は魚巢（人工水草）に卵を付着させていましたが、孵化器による方法では卵の粘着性を除去したのち、孵化器に受精卵を収容します。円筒型の孵化器の下部から飼育水が送られ、卵の間を通過した水は上部から排出される構造になっています。

孵化器の中では比重の小さい死卵は上層に、正常に発育した卵は下層に分布し、サイフォンなどで上層の死卵を除去して、正常な卵だけを管理できる利点があります。また、従来の魚巢に卵を付着させる方法と比べて、孵化器は卵を高密度に収容でき、水生菌対策の消毒に用いる薬剤も大幅に削減できました。

種苗生産の結果では、第一回目の選別の際の生残率は2003－2005年の従来の魚巢での結果が36.4－45.0%であったのに対し、孵化器を用いた2006年は62.9%となりました。直近の4年間で最も高く、量産規模において安定した生産結果を得るにも孵化器が有効であると考えられました。

孵化器による卵管理は上記のように優れた点が多いため他県の種苗生産施設からも注目されています。

[写真はこちらから](#)

〈編集後記〉

去る7/31と8/2に「かながわ海と生物の教室」と「親子おさかな料理教室」の2つのイベントを実施しました。前者は磯採集と観察・同定を、後者はアジ・サバの干物作りを体験していただきました。参加者を公募したところ、両イベントとも定員の3倍以上の応募があり、抽選の結果、残念ながらお断りさせていただいた方に大変申し訳なく思っています。

両イベントとも盛況で、参加された皆様には楽しんでいただけたとともに、神奈川の海や水産物に興味を持っていただけたと思っています。ありがとうございました。今後もイベントを企画してまいりますので、よろしく願います。

なお当日の様子は、近々ホームページに掲載する予定ですので楽しみに。

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
■配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン207-1

「♪もしもしカメよー♪」



写真1 試験場のカメ池

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン207-2

円筒型孵化器によるアユ卵の管理

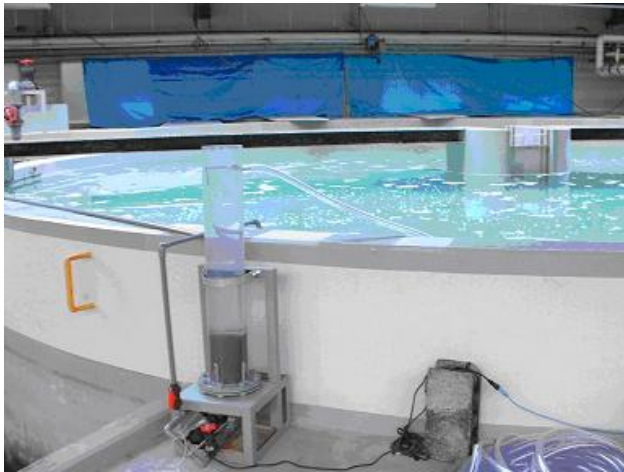


写真1 円筒型孵化器によるアユ卵の管理

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガ208

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.208 2007-08-10

-- Fish-mag >°))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.208 2007-08-10

~~~~~

## □研究員コラム

○調査あれこれ7 (内水面試験場 山本 裕康)

○情報処理室ごぼれ話 ― 親切な機能も時として!? ― (内水面試験場 利波 之徳)

## ○調査あれこれ7

メルマガ原稿の1回目にも書いたのですが、お題を「調査あれこれ」としてありますが、本文は調査自体の内容は研究員にお任せ(?)で同行した調査中の出来事中心にお話をさせてもらっています。今回、前置きをしたのはかなり調査自体から外れた(水産にも関係ないかも…)私事について、お話をしようと思ったからです。

同行した調査は小田原の早川(アユの資源量)調査。軽トラ(幌付)で、研究員のM氏と早川の調査現場まで行きました。現場は、早川の太閤橋付近で現在は護岸工事が行われて橋のたもとから車の乗り入れが出来、数台の駐車スペースもあります。しかし、当時は駐車スペースどころか、川に下りるのもガードレールを越え、急斜面を滑り落ちるように下りなければならず、道具を持って下りるのは一苦労でした。このような現場なので、車は魚類調査中の表示をして路上駐車。(幸い交通量は無いに等しい。)場所は日差しを避けて橋の脇(なるべく木陰の下。)に駐車しました。

事件は、二人が調査に没頭している最中に進行していました…。調査を終えて帰路につき、小田原・厚木道路のサービスエリアでトイレ休憩&水分補給で売店でドリンクを購入しようとしたその時、「あっ!」私の財布に確かにいたはずの、諭吉君数人が…一人もいない???。軽トラの助手席、足元のDバックの中ほど(タオルや着替えの下)に入れて、ドアはしっかりロックされていたのに???発見を遅らせる為に、諭吉君を連れ去った犯人はバックもロックも元通りにして置いたようです。M氏の、財布は衣服のポケット、バックは軽トラの荷台で事なきを得ました。

職場に戻り次第、小田原警察に連絡を入れて翌日に現場検証の為、軽トラで再度太閤橋へ…。警察によると付近で空き巣や車上荒しが何件か発生していたようです。河川調査ともなると、携帯、財布の水没は避けたいとつい、車中に置いて行きがちですが、ビニール袋等で身に着けるのが一番のようです。

## ○情報処理室ごぼれ話 ― 親切な機能も時として!? ―

内水面試験場で使用していたパソコンやプリンタが更新時期を迎え、新しい機器が届きました。以前であれば、パソコンを場内LAN(場内で利用してるネットワーク)に繋いで立ち上げるところまでは納入業者が行ってくれましたが、昨今は、経費も削減されていますから、納入業者に頼むことが出来ず自前で行わざるを得ません。

でも、パソコン自体も進化していますから、少しの知識と経験があれば、そんなに難しい作業ではありません、ほとんどの場合は。でも今回は、何度か落とし穴にハマってしまいました。その一つをご紹介します。

皆さんも経験ありませんか、ウィルス対策ソフトの落とし穴に落ちたこと。それは、プリンタをセットアップしているときのことでした。手順書に従ってプリンタをLANに繋ぎ、管理用のソフト等もインストールが終わり、テスト印刷もOK。ここまで来れば、もう大丈夫! なはずが…

他の仕事を片付けてセットアップ作業に戻り、他の職員にもわかりやすいように手順書の解説を作って印刷しようとした時! 印刷機は何の反応もしてくれません。画面には「通信エラー」の文字が!? そうなんです! ウィルス対策ソフトのファイアウォール機能が邪魔をしていたんです!!

普通ならプリンタドライバ(パソコンの中にあるプリンタの制御プログラム)は、ファイアウォール機能に引っかからないのですが、このプリンタは、ネットワークへの接続を簡単にするため、独自の管理ソフトを介してパソコンとプリンタが情報をやり取りするようになっていました。この親切な機能が、アダになってしまった訳です。

原因がわかってしまえば、後は、メーカーのサポートダイヤルに電話して、必要な情報を聞き出し、ファイアウォール機能を設定しなおすだけ。とはいえ、「さっきは出来たじゃないか」とこみ上げる怒りを抑えつつ原因を探し続けた1時間、やっぱりパソコンとお付き合いするには根気が要りますね。

-----  
■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）  
■配信の変更、解除は、こちらから↓  
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン209

-- Fish-mag >° )))< -----

／KN／ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.209 2007-08-17

~~~~~

□研究員コラム

○浜のかあちゃんの店オープン (企画経営部 池田 文雄)

○ホットケない? ホトケドジョウ (内水面試験場 勝呂 尚之)

○浜のかあちゃんの店オープン

神奈川県三浦半島、相模湾に面した長井地区に、横須賀市長井町漁協女性部が「浜のかあちゃんの店」を平成19年7月3日にオープンしました。店は漁協を始め横須賀市が漁業の活性化につながればと支援し、漁協の隣に施設が完成しました。この店は同漁協女性部(川名正子部長、会員42名)が運営し、スリ身の他、サバ・アジの干物などの加工・販売する店です。

漁協女性部が運営するこの加工・直販施設は珍しく今後が注目されます。加工する原料は、川名部長は長井漁港に水揚げされる魚にこだわり安心、安全なサバ、アジ類の小型魚、シイラ、ボラなどの商品で、これらはほとんどが未利用資源です。そこで、女性部はこの未利用資源に付加価値を付け有効利用することに着目し、魚食普及にもつながればと考えています。

販売品目は白身魚のスリ身、サバのスリ身、小アジのフライ(生)、テングサ、サバ・アジの干物、塩蔵ワカメ、コンブ等ですが、今後は種類を増やして行くことを考えています。また、地元で獲れた季節の野菜(かぼちゃ、とまと、きゅうり、じゃがいも、なす等)も同時に販売し、地場産の農水産物普及で長井町漁協女性部をアピールし、多くの人に足を運んでほしいと考えています。

現在は、販売商品の加工に会員が毎日奮闘しているところです。また、地産地消に熱心な女性部は、地元を中心に県内の各農協等のグループの主婦を対象に川名部長他で「魚料理教室」を開催しPRもしています。

店の営業は、毎月の土、日、祝日の午前10時から午後3時まで。

問合せは、長井町漁業協同組合 電話 046-856-2556まで。

○ホットケない? ホトケドジョウ

ホトケドジョウと言う魚を知っていますか? 柳川鍋にするあの長いドジョウとは違い、丸くて小さく、よく泳ぐドジョウです(写真1)。昔は谷戸の小川や水田にたくさん生息していました。私が育った川崎市北部の谷戸でも、ひと網で十数尾も入ったものです。

子ども達の間では「たんぼのハゼ」と呼ばれ、人気のあったザリガニやイモリとは違って、網に入ってもあまり喜ばれませんでした。私が小学生になった頃、この魚を図鑑で調べ、ホトケドジョウであることを知りました。友達に「たんぼのハゼは、ドジョウの仲間だぞ。ひげがあるだろう?」と説明しましたが、誰からも相手にされなかったのを覚えています。

時代は流れ、谷戸は次々と埋め立てられ住宅地になりました。ホトケドジョウは激減し、今では環境省・県の絶滅危惧種です。内水面試験場では、本種の保全のため、飼育下での遺伝子保存と生息地の復元研究に取り組んでいます。

試験場内に「谷戸池」と呼ぶ水辺ビオトープを造成、本種を放流して成長や生態のデータを収集しています。毎年、繁殖が確認され、夏の間はたくさんの稚魚が泳ぐ姿が見られます。ホトケドジョウの他にも、ヌカエビ、カワニナ、ゲンゴロウ類、ヤゴ類等、たくさんの生物が生息し、2007年までに20目50科81種が確認されました。

ホトケドジョウがすめる環境を保全・復元することによって、同じ水域に生息する多くの生物を保護し、谷戸の生態系を復元することができるのがわかったのです。

私の住んでいた川崎市の谷戸も、その一部をホトケドジョウの生息地として残すことになりました。いつまでもたんぼのハゼが見られる環境を守っていききたいですね。

[写真はこちらから](#)

- 水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
- 配信の変更、解除は、こちらから↓
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311
ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOP^](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メルマガ210

神奈川県水産技術センターメルマガ VOL.210 2007-08-24

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.210 2007-08-24

~~~~~

## □ 研究員コラム

○できそうで、できない。 (企画経営部 鎌滝 裕文)

○-ダンゴウオの話- (企画経営部 臼井 一茂)

○できそうで、できない。

へんな題名ですが、実は今、シクラメンの夏超えに挑戦していて、今のところ3連敗中です。ということは3年連続でシクラメンを駄目にしていくということです。今までは本を読んでマニュアルどおり、葉を落として、暗いところで仮眠させるような夏場の越し方をやっていたのですが、いつも秋になっても芽が出ず、失敗していました。できそうな感じはするのですが、何故かできません。

現在、4年目の挑戦をしていますが、葉を残しての夏超えに初めて挑戦していて、今のところ順調にっています。生き物を飼う時は、「その生き物の立場に立ってよく考えてみる」とよく親に言われたものですが、本を読んでもなかなかうまくいきません。でも、実践している中で、あることがきっかけで簡単にできてしまったということも聞いたりします。

実は意外なところに大きなヒントがありました。仕事で漁業の現場を回っていますが、難なく夏を何度も越えているシクラメンを発見したのです。それは横浜市内のとある現場なのですが、夏場は気づいたときにだけ水をやるのだそうで、あとは「ほったらかし」というような育て方でした。夏場は外に置いていて、日陰っぽいところにありますが、昼間は太陽があたっているようなところでした。

雨が降れば濡れるし、正直、これでは無理だろうという気がしますが、冬には深紅の立派なシクラメンが咲いています。

このシクラメン、半年くらいは、荒っぽく外で育てられてはいますが、ひとつだけよい点もあります。それは海に非常に近いところで育てられているということです。夏場といえどもやはり海に近いところはそれなりの涼しさがあります。夏場でも千葉県の銚子は気温が低めということが多くのご存知な方も多いと思います。これと似たような感じなのかなと思います。

これらのヒントをもとに風通しのよい場所、適度な水分、適度な明るさなどの条件をよく選んで、4年目は取り組んでいます。実は、今、仕事で取り組んでいるナマコの種苗生産もこれと似たようなところがあって、稚ナマコができそうで、できません。実はほったらかしの粗放飼育で、稚ナマコを誕生させている経緯があります。どこかにヒントがあるはずですが、シクラメン同様私にとってはかなりの曲者です。

何らかのきっかけがあればすぐにでも何とかできるのではないかと感じていて、こちらも早くなんとかしないといけないなあと思っています。

[シクラメンの夏場の様子と稚ナマコはここからどうぞ →](#)

○-ダンゴウオの話-

先日、研究所の近くにある水族館、油壺マリンパークの飼育員の方から連絡をいただきました。変わった魚がとか、病気がとかいろいろな電話があるのですが、今回の内容は、「とてもかわいくてユーモラスな魚が産卵しましたよ」とのことでした。園内には、サメや熱帯魚、そして水温の低い海に住む魚たちが飼育展示されて、そのバックヤードでは出番を控えたアイドルたちが、今か今かと待ちかまえています。

飼育員の方の案内で、深層水を汲み上げて飼育しているバックヤードに行き、大きな水槽が乱立する中、「これですよ」って手のひらがさっと透明なプラスチックの小さな水槽に向けられました。優しくエアレーションされているその水槽には、さらに小さな水槽が入っており、そこにはヤマモモのような、木イチゴのような透明感のあるオレンジ色で、小さなツブが寄り合わさ

ったものが入ってました。よくよく見ると、その中には小さな小さな黒い点があって、その下にはなんと1ミリほどの稚魚が、何尾もピタッと壁に張り付いて、身動きせずにいました。

「これはダンゴウオの子供です。昨日からふ化し始めたんですよ。」との、説明がほしいところに、程よい観察時間をあけてくれたの解説、「うむっ」。

しかし、あまりにも小さすぎて、団子といわれれば団子の形なんだろうなと思っていた瞬間、さらに解説が入り、「その小さなケースの入った水槽の底にいる丸っこい魚がダンゴウオの親です。」とのこと。自分の顔より小さな水槽に対し、ゆっくりと目線を下に向けると、いました、2、3センチの丸っこい物体が、ちゃんと底にいました。しかも、身動きしている様子がないのに、ずっと数センチ動いては止まり、止まっているかと思えば、ずっと数センチ進む。しかも、動き始めには直進だけでなく、直角、反転をその動きに取りまぜながらなのです。その様子はまるで“一人ダルマさんが転んだ”状態。

さらによく見ると、焦げ茶やら、黄色やら、赤色やら何色ものダンゴウオが見えました。で、よくよく観察すると、なんとおっきな唇。オバキューの様にユーモラスでコミカル、さらに「ウムムムム」でした。

このダンゴウオ、冬のこの時期に相模湾の沿岸でもよく見られる、寒冷な海の住人なのだそうです。その仲間には、フウセンウオ、イボダンゴ、ヒゲダンゴ、コンペイトウなど、茶菓子か駄菓子かのユニークな名前ばかりでした。その中で一種だけ知っていたのはホテイウオでした。最近では北海道産のものが魚屋に並ぶことがあり、みそ汁や鍋でいただいたことがあります。そういえば、キャビアに似た製品が作られる、ランプフィッシュもその仲間だったかも。

ダンゴウオは、成長しても3-4センチ程、寿命は約1年だそうです。卵は水深20メートル以下の浅瀬で、貝殻や岩の割れ目などに産みつけられ、オスがそれをふ化まで守り、命のバトンを渡していくそうです。

ダイバーからは、「海のポケモン」とも呼ばれているこのダンゴウオ、その生態はいまだ謎に包まれているそうですが、この相模湾でいつまでもコミカルな彼らが産卵にこられる海を残し続けたいですね。

そうそう、油壺マリンパークで展示もされたそうです。見る楽しみが増えましたね。

[ダンゴウオの写真はこちらから](#)

-----  
■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）  
■配信の変更、解除は、こちらから↓  
<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会  
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子  
電話：046(882)2311  
ご意見・お問い合わせ：[fish.415@pref.kanagawa.jp](mailto:fish.415@pref.kanagawa.jp)

-----  
[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン210-1

できそうで、できない。



写真1 シクラメンの夏場の様子



写真2 稚ナマコ

[記事に戻る](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガジン210-2

－ダンゴウオの話－



写真1 ダンゴウオの親



写真2 ダンゴウオの稚魚

[記事に戻る](#)

**神奈川県**

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガ211

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.211 2007-08-31

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.211 2007-08-31

~~~~~

□研究員コラム

○Dr. David Starr Jordan (資源環境部 岡部 久)

○漁師さんや漁協等のブログ (企画経営部 荻野 隆太)

○Dr. David Starr Jordan

横須賀市自然・人文博物館の館長、林公義先生の退官記念講演での出来事です。林先生は日本の魚類学の父といふべき田中茂穂先生とともに「日本産魚類目録 A catalogue of the fishes of Japan」の作成に携わった2人の外国人の写真を示され、「ジョルダン博士の写真は、神奈川県水産技術センターの岡部さんに似ている」と唐突におっしゃいました。私の顔を知っているひとは大いに受けていましたが、そうでない人たちはどれがこの写真に似ているのかと、周りをキョロキョロ見始めました。

私はそんなに似ていないと思いますが、深海魚であるホウネンエソやソコダラの仲間から淡水魚のタナゴの仲間、海産魚であるメバルの仲間やカジカの仲間、フグの仲間、カレイの仲間、天皇陛下が得意とするハゼの仲間、かわいらしいチョウチョウウオやダンゴウオなど、日本産の多くの魚を新種として記載した世界的な魚類学者に似ているといわれて気持ちが悪いわけはありません。

博士がどんな人物だったのかを簡単にご紹介します。

デイビッド スター ジョルダン博士は、1851年アメリカのゲインズビルの農家に生まれ、コーネル大学を卒業後、インディアナ医科大学から医学博士号を受け、インディアナ大学の教授に就任、学長を務められました。その後、スタンフォード大学の初代学長を務めていた1900年ごろに来日され、東京大学の油壺臨海実験場で海洋生物の採集と講義をされています。神奈川県にゆかりが深い博士ですが、当然のことながら北米やハワイの魚に関するものを始め、1913年の「日本産魚類目録」も加え、魚類学に関するものだけで650もの著作があり、非常に多くの業績を残されるとともに、反戦・平和主義者であったと聞きます。

似ているといわれた私としましては、中身も似てみたい偉大な先人であります。

○漁師さんや漁協等のブログ

インターネットの主な役割と言えば、(1)検索を始めとする情報収集と、(2)ホームページ等を通じた情報発信に大別され、情報化社会の中核を成しています。そして、大自然の海で働く漁業者とインターネット！一見、かけ離れた存在にも思えますが、インターネットを通じて得られる気象・海況・漁況・市況など、漁業者に必要な情報も多々あります。

また、最近ではWeblog (ブログ) の出現により、インターネットによる情報発信がより身近な物になりました。パソコンがなくてもi-モード等、カメラ付き携帯電話があれば、画像添付メール送信操作で簡易且つどこでも、例えば漁業の現場、海上からも情報発信できるようになりました。

普及指導部では、漁業者グループ等を対象に勉強会を開催して、インターネットを通じて得られる漁業者に有効な情報の普及や、ブログを通じた情報発信についても指導しています。

< 漁業者研修会を受けた、漁師や漁協等が始めたブログの一例 >

● 金田湾朝市情報局

金田湾朝市部会に所属する漁業者及び農業者が、お勧めの旬の食材、レシピや金田湾朝市でのイベント企画を情報発信しています。これを見れば、三浦半島の旬の情報はばっちり！

<http://sea.ap.teacup.com/kaneda/>

- 上宮田漁協で大型定置網を営む「つうさん」のブログです。コンセプトは地産地消！

<http://sea.ap.teacup.com/isaribi/>

- みうら漁協松輪支所 エナ・ヴィレッチのブログ

サバの最高級ブランド 松輪サバを始めとして、松輪の一本釣り漁で揚がる、美味しい地魚情報。その他にも…

<http://sea.ap.teacup.com/matsuwa/>

松輪サバー一本釣り漁師「勝利丸さんの画廊」自ら描いた絵を公開しています。

<http://sea.ap.teacup.com/applet/matsuwa/msgcate18/archive>

- 長井の青年漁業士 かねしち丸さんのブログ

湘南しらすの日々の漁模様や、直売情報を発信しています。

<http://sea.ap.teacup.com/kane7/>

- 小田原の青年漁業士 海真丸さんのブログ

刺網漁業での日々の漁の様子や、珍しい魚、小田原・港の朝市等、多彩な情報を発信しています。

<http://sea.ap.teacup.com/kaishinmaru/>

近年、食の安全・安心に消費者の関心が高まっていますが、魚は勿論！情報も鮮度が一番！漁師のブログにアクセスすれば、旬の肴や日々の海の情景が垣間見えますよ。

■ 水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）

■ 配信の変更、解除は、こちらから↓

<http://www.agri-kanagawa.jp/suisoken/mailmag/>

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

ご意見・お問い合わせ：fish.415@pref.kanagawa.jp

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガ212

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.212 2007-09-07

-- Fish-mag >°))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.212 2007-09-07

~~~~~

## □研究員コラム

○キンメダイはどのくらい生きるの? (資源環境部 秋元 清治)

○人工産アユ種苗について (内水面試験場 場長 水津 敏博)

-----

○キンメダイはどのくらい生きるの?

長生きしたいと思うのは人間の性であるが、はたして魚もそのような思いを抱くのであろうか。ちなみにギネスブックによる人間の長寿記録は女性が122歳、男性が120歳（日本の泉重千代さん）とのことである。魚の場合もウナギやチョウザメは長寿で知られるがしよせん人間には及ばないだろうと思っていた。しかし、先日話題となったベーリング海の100歳のSebastes borealis (ヒレグロメヌケ) のようにかなり長生きする魚もいるようである。

(参照 <http://www.fakr.noaa.gov/newsreleases/2007/rockfish040507.htm>)

一般に魚の年齢は耳石や脊椎骨に1年に1本刻まれる年輪を数えることによって推定する。しかし、この年輪は魚の成長が著しい若齢期には比較的明瞭に刻まれるが、魚が大きくなり成長が停滞すると不明瞭となり判別が難しくなる。また、魚の寿命は水族館の飼育記録からも推定できる。しかし、動物園で飼育された動物が自然界のものより長生きすることを考えると、自然海に住む魚の寿命も水族館の飼育記録から割り引いて考える必要がありそうである。

キンメダイははたしてどのくらい生きるのか? 私が観察した大型魚の耳石年輪は不明瞭なものが多く最高齢は18歳までしか確認できなかったが、高知県水産試験場の明神寿彦主任研究員は耳石年輪から26歳という高齢魚を確認している。また、標識放流した1-2歳のキンメダイが17年後に再捕された事例もあり、自然海のキンメダイが20年以上生きるとは確実であろう。

長生きで成熟が遅い魚が乱獲されやすいことを考えれば、キンメダイについても予防的な資源管理を行うことが重要であろう。

キンメダイの年齢と成長について関心のある方は以下をごらんください。

[/uploaded/attachment/533836.pdf](#)

-----

○人工産アユ種苗について

アユは神奈川県の内水面漁業の最も重要な魚です。試験場でもアユに関する研究は大きなウエイトを占めています。アユの研究で力を入れていたのは、人工産アユ種苗の生産です。人工産アユ種苗については、昭和40年代から技術開発を進め、先輩たちの努力により、昭和50年代から毎年100万尾を生産し県下河川に放流できるようになり、現在は、県から民間に委託して生産しています。

最近この人工産アユ種苗に対して、漁業者から問題が提起されています。それは、放流サイズが小さい、放流後すぐになくなる、群れる、ふらふらしている、病気（冷水病）にかかりやすいなどであり、今後ともこのような種苗を放流しても効果が無いのではないかとということでした。

そこで、この問題を解決するため漁業者と県で検討を重ね、平成19年度から人工産アユの性質などについて漁業者と県が共同調査を行うことになりました。

調査は種苗の標識放流などですが、人工産アユの再捕が確認されたことから、漁業者は人工産アユ種苗の放流について一定の効果があることを再認識されたようでした。今後とも調査を継続し、人工産アユについて改良できることがあれば対応していき

たいと思っています。

---

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）

■メルマガの配信の変更、解除、ご意見やお問い合わせはこちらの[メルマガお問い合わせフォーム](#)からお願いいたします。

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

---

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。



# 神奈川県水産技術センター メールマガ213

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.213 2007-09-14

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.213 2007-09-14

~~~~~

□研究員コラム

○“塩分” -海の水のしょっぱさ-【その6】 (資源環境部 山田 佳昭)

○沿岸域の多様な生態系に根ざした沿岸漁業の存続 (その1) (栽培技術部 一色 竜也)

○“塩分” -海の水のしょっぱさ-【その6】

正確に、そして簡単に塩分を測定する方法が模索されましたが、そうこうするうち、いっそのこと電気で測ってしまえ、といった考えが出てきます。

電気が流れる、というのはどういう現象でしょうか。

昔、物理の授業で習ったことを思い出しますと、電子のような電荷を帯びた粒子が移動することだったと思います。電気をよく通す金属などには原子核に捉まっていない自由電子というものが多数あって電流と逆の方向へ移動している.....でしたっけ？

水は本来ほとんど電気を通しません。純粋な、何も溶けていない水の場合、水の分子H₂O（数字が下付きにならずすみません）は、水素イオンH⁺（記号が上付きにならずすみません）と水酸化イオンOH⁻にほんの僅かしか電離しません。電荷を帯びた粒子が少ないから電気は流れにくいです。

話がそれますが、分析試験に使う水は蒸留や脱イオンして不純物を取り除いたものを用います。この水を作る機械が実験室には必ずありますが、この機械には水の電気抵抗値が表示されます。電気抵抗値が高い → 電気が流れにくい → 不純物が少ない、といった目安になります。

水という物質は、他にもちょっと変わった性質を数々持った面白いものなのですが、さらに話が脱線しますので、別の機会にいたしましょう。

自然界では、何も溶けていない水、というものは、まあおよそ存在しないでしょう。雨にも空気中のさまざまな物質が溶け込んでいます。溶け込んでいる物質の量によって電気の流れ方が違ってくる、このことが電気によって塩分を測定する上での基礎になります（やっぱり続く）。

○沿岸域の多様な生態系に根ざした沿岸漁業の存続 (その1)

以前「水産物のジャストインタイム生産は可能か？」で論じたとおり、日々の漁獲量が不安定であることから、漁業生産にジャストインタイムは困難であることを述べました。

遠洋漁業や沖合漁業などの漁船漁業は漁場や漁期を人間側が合わせ、さらに鮮度の低下しやすい水産物を高度な冷凍技術によって保つことが可能になり、ある程度不安定な生産を解消するような方向へと進んできましたが、必要な時に必要な分だけという条件を充たすに至っていません。さらに、これらの漁業は対象魚種をある程度固定せざるを得ない構造も持っています。

特に漁業が大規模になればなるほど、他の魚種への転換は極めて難しいのです。三崎の遠洋まぐろ延縄漁業は、その多くがメバチを主体に操業を行ってきましたが、同種への依存度が7-8割と高く、資源の減少や魚価の低迷で漁業の存続が困難な状況に追い込まれています。

以前にメバチ以外の他の魚種、例えばキハダやカジキ等の混獲種類を加工等で付加価値を高め、メバチの依存度を少しでも減らせないか検討されたことがありますが、他の魚種の魚価をそれまでの2倍に引き上げても採算が取れない結果となり、事実上不可能であることが分かりました。

遠洋まぐろ延縄漁業がメバチを主対象種とする理由は、魚価と漁獲量のバランスが他の魚種に比べて極めて良く、また漁具や漁船装備もそれに特化してきたため、他魚種への転換は殆ど不可能といえるのです。

一方、沿岸漁業は限られた海域内にその活動が縛られているため、漁場や漁期の選択で漁獲の不安定度を埋められる幅は小さいです。こうしたリスクを多種多様な魚種を柔軟性に利用することで埋め合わせてきたといえます。

あるときはワカメ、昆布、天草といった海藻類、あるときはサザエやアワビといった磯根資源、鯖や鯉といった回遊魚が来ればそれを漁獲するなど、多種多様な漁撈技術を巧みに組み合わせて、その時々をうまく営んできたのです。しかし、それぞれの沿岸資源は変動が激しく、計画的に営漁することは困難で、出たところ勝負の部分が多分にあるといえます。

昨今、需要サイドからは少量多品目かつ安定供給を要求が強くなっております。この要求に対し沿岸漁業の生産が少量多品目であるという部分は合致しますが、それぞれの安定供給はとても適えられないと思われます。（つづく）

■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
■メルマガの配信の変更、解除、ご意見やお問い合わせはこちらの[メルマガお問い合わせフォーム](#)からお願いいたします。

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会
住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子
電話：046(882)2311

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メルマガ214

神奈川県水産技術センターメルマガ VOL.214 2007-09-21

-- Fish-mag >°)))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.214 2007-09-21

~~~~~

## □研究員コラム

- 「豊かな海づくりイベントのお知らせ」 (企画経営部長 長谷川 保)
- アナゴの雄と雌 (資源環境部 田島 良博)

### ○「豊かな海づくりイベントのお知らせ」

今回は、県で行う催し「かながわの豊かな海づくり」をご紹介します(水産技術センターの職員も参画)。

このイベントは、平成19年9月30日(日曜日)の午前7時から午前12時までの間、横須賀市平成町にある「横須賀魚市場」及び「新安浦港」で開催いたします。

新安浦港では「ヒラメの稚魚の放流」を午前9時から行い、放流に参加された方には、タコ(茹でたもの)の試食を用意しています。放流の受付は放流場所で午前8時30分から行い、先着500名とさせていただきます。

このほか、近くの「横須賀魚市場」では、栽培漁業、東京湾の漁業、水産資源の回復に関する取組のパネル展示や東京湾で獲れる魚を展示しており、東京内湾の水産資源の回復などについて、皆様にも感心を持っていただければと考えています。

(参考 次のURLは開催の概要と会場案内図)

<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/suisan/shigenkanri/070824/070824event.html>

なお、この「かながわの豊かな海づくり」は、「横須賀魚市場」で開催される「よこすかさかな祭り」と同時開催となります。皆様のご来場をお待ちしております。

### ○アナゴの雄と雌

前回、マアナゴの資源調査のために、生物測定調査を行っていることとお話しました。そのときはアナゴを「開く」お話でしたが、今回はマアナゴの雄と雌についてのお話です。

マアナゴの雄と雌は、外見では区別がつかみませんので、おなかの中の生殖腺を見て判別します。40cm以上の大きさであれば、はっきり違いがわかるので迷いませんが、30cm以下の小さなものと、中には「雄?雌?・・・?」と悩むものもあります。

さて、マアナゴの雄と雌、どちらが多いと思いますか?

実は大きさによって違うようです。「ようです」というのは、まだ調べている途中なので、結論が出たわけではありません。以前から大きなものは雌ばかりという報告があり、私もまだ50cmを超える雄は見たことがありません。

調べてみると、小さいものは雄が多く、大きいものは雌ばかりになります。そして中くらいのものは雄と雌が1対1くらいです。いささか抽象的な表現ですが、何cmくらいがそれぞれの境目になるのか、今それを調べるため、毎月マアナゴの測定をしているわけです。

では、なぜそんなことを調べる必要があるのでしょうか?

それは面白いからです。いえ、笑えるという意味ではなくて、研究している立場で面白いというのは、それがマアナゴという生き物の特徴のひとつであり、生態を知る重要な鍵になるからです。小さいうちはみんな雄なのか、雄と雌では成長が違うのか、雄は短命なのかそれともどこかに行ってしまうのかなど、疑問は次々と湧いてきます。

さまざまなデータと組み合わせることで、これらの謎に1歩ずつ迫れると思うと、1回あたり3時間以上かかる測定も、それほど苦にはなりません。

将来にわたってマアナゴの資源を利用するためには、生態を知り、資源の状況を判断して、適切な資源管理をして行く必要があります。まだまだ道のりは長いと思いますが、少しずつでも謎に迫っていければと思いつつ、アナゴと向き合っています。

-----  
■水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）

■メルマガの配信の変更、解除、ご意見やお問い合わせはこちらの[メルマガお問い合わせフォーム](#)からお願いいたします。

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311  
-----

[メルマガTOPへ](#)

## 神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

# 神奈川県水産技術センター メールマガ215

神奈川県水産技術センターメールマガ VOL.215 2007-09-28

-- Fish-mag >° )))< -----

/KN/ 神奈川県水産技術センターメールマガジン VOL.215 2007-09-28

~~~~~

□研究員コラム

○「よもやま話 6」 (企画経営部 村上 哲士)

○空から見た景色 (資源環境部 仲手川 恒)

○「よもやま話 6」

6回目の登場となる今回は、回想録ではなく、現在の話となります。

もうしばらくは普及に居られるのかなと思っていたら、6月に異動となってしまいました。とは言っても別な職場に変わったわけではなく、所内での異動、それも同じ部で普及指導担当から研究担当になり、座る場所が数十メートル横に移動しました。

しかし、仕事内容はガラリと変わり、今までのように外に出かけることは減多になりましたと言うよりほとんど無い。ほぼ一日パソコンの前に座り、会議用の書類を作ったり、その報告書を書いたり、各種会議の日程調整やら場所取りやら、他所との連絡調整などが主な仕事になりました。業務内容に総括とか企画調整などとあると雑用も多いということでしょうか…。

今までの仕事が外に出る場合が多かっただけに、ずっと所内に入り浸り(というより缶詰)でパソコンの前だと目は疲れるは、肩は凝るはで、同じような状況で仕事をされている方々の苦労が忍ばれます。だいたい私パソコンはそんなに好きな方ではありません。こういう部署もあるということですね。

今一番の仕事といえば、当所の研究機関としての試験研究の基本方向を定めた「農林水産関係試験研究推進構想(水産業の部)」というものがあるのですが、基本的には5年間を目途に見直して、その時々的情勢に合わせて改訂しております。今年は丁度その年に当たってまして、プロジェクトチームを作って作業の最中です。

この5年間(当面5年間ですが、もっと長期の視点に立った展望も必要です)で当所として漁業者や県民の方々のために最優先で取り組む課題は何か、また、その課題を解決するためにはどのような研究を行うべきか。無い知恵絞って奮闘中です。これもまた私の苦手な分野ですが、幸いにしてプロジェクトチームには優秀な方々が揃っており、皆様よろしく願いますの状態で

来年にはしっかりしたものをお見せ出来るように、また、作ったは良いが絵に画いた餅にならないように、成果を出して頂けるよう所員一同頑張っていく所存です。

○空から見た景色

前回執筆した195号では、「海から見た景色」について紹介させていただきましたが、今回は「空から見た景色」について紹介させていただきます。

皆様は旅行などに行かれる際、飛行機に乗られることがあると思います。運がよく雲がなければ飛行機の窓からすばらしい景色が見られますね。

水産技術センターでは、赤潮の発生状況や藻場の分布状況、漁船の操業状況等を調べるために、ヘリコプターにより上空から海上の調査を行っています。

ヘリコプターは飛行機よりも低空を飛ぶことができるため、海面や陸地をはっきりと観察することができます。

ヘリコプターの室内は少々狭く、エンジン音はやや大きいです。短時間で広範囲を回ることができます。また、撮影等のため、連続してヘリコプターを旋回させることができますが、これは乗り物に酔いやすいとちよいとつらいです。

上空から神奈川県を眺めると、雄大な海に面し、陸地には緑がまだまだ多いことを実感します。

[写真 空から見た景色](#)

- 水技Cメールマガジン（毎週金曜日発行）
- メルマガの配信の変更、解除、ご意見やお問い合わせはこちらの[メルマガお問い合わせフォーム](#)からお願いいたします。

発行：神奈川県水産技術センター 広報部会

住所：〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子

電話：046(882)2311

[メルマガTOPへ](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。

神奈川県水産技術センター メールマガジン215

空から見た景色



写真1 操業する遊魚船



写真2 相模川河口上空



写真3 MM21



写真4 三浦市上空



写真5 城ヶ島上空から三浦半島を望む

[記事に戻る](#)

神奈川県

このページの所管所属は [水産技術センター](#) です。